
黒と白の約束

浅倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒と白の約束

【Nコード】

N8781J

【作者名】

浅倉

【あらすじ】

一見普通の高校生高崎恭一。当然学校を黒い塊が襲い、その後飛ばされた異世界。そこは16年前までは、『黒神』と『白神』と呼ばれる二柱の神がいた世界。そして現在は”陰”と呼ばれる化け物が存在し、日々血の臭いが充満する世界。剣あり魔法ありのファンタジーです、それほどでもないですが残酷描写などもあります。お気を付けください。■現在改稿中です。ご迷惑をおかけします

第一話

季節は梅雨も明け日本独特のジメジメ感に嫌になってくる頃、普通の学生ならもうすぐ夏休み。

高校1年になったばかりの恭一達は、受験もまだまだ先だとこの時期はのんびりと出来る。

大体、大学受験の実感が沸かない。

「うああああ、今日もあっちいなあ……」

「お前らのラブラブ加減が？」

太陽がさんさんと降り注いでくる窓のすぐ隣に自分たちの席が位置しているからで、もちろんそんな訳ではない。

教室で前の席に座っているクラスメイト兼幼馴染の太一に冗談交じりで笑いながら返すと、間髪いれず後頭部に衝撃が走った。

勢いを殺しきれず机に額をぶつけると太一から仕返しとばかりの「ざまあ」という有難いお言葉をいただく。

こんちくしょう、覚えてろよ。

「気温に決まってるでしょうが、バカいち」

続いて元気でハキハキした少女の声が降ってくる。

後頭部と額の両方を擦りながら顔をあげると、そこにはそれなりの大きさもある分厚い辞書を片手にもったもう一人の幼馴染である美夜が口元をいやに歪ませて立っていた。

ぱっと見ではどちらかというと細身美少女である美夜、とても分厚い辞書を片手で振り回せる剛腕の持ち主には見えないのだが、残念ながらガチで殴り合いの喧嘩すると俺と太一の二人がかりでも返り討ちにされる力の持ち主だ。

世の中末恐ろしいばかりである。

そんな美夜と付き合える太一も世の中の七不思議のうちのひとつだと俺は思っている。

「教室内で辞書振り回すなよ、誰かに当たったらどうするんだ。この俺みたいに」

「そんなヘマこのアタシがするわけないでしょ!!」

否定出来ないのが少し悔しい……

恨みがましく太一の隣の席に腰を下ろした美夜を見ると、突如校庭のほうから黄色い悲鳴があがった。

するとそれに同調するかのように、クラスの何人かが窓際に寄ってきて余計に暑苦しいことになった。

恭一たちもつられるようにして窓の外の校庭を見ると、校門前に黒塗りの車が止まり中から制服を着た男女が降りてくる。

この学校の生徒会長と副会長にして、全校生徒公認の美男美女カップルだ。

ちなみに会長が男で、副会長が女だ。

家柄・容姿・成績、全て完璧という非の打ちどころがないその二人は、当然校内に多数のファンがおりファンクラブも存在する。

美女のとなりにはイケメン、誰かこの法則をぶっ壊してはくれないだろうか。

ついでに言うと二人は婚約もしているらしい、……死んでしまえ。一般庶民の平凡な高校生である俺には世界が違う、出来れば関わりたくない部類の人間だ。

さして興味が無い（主に会長に）俺はため息をつくといつの間に移動してきたのか、美夜が太一の両肩に肘をつき頭に顎をのせて二人をうっとり眺めていた。

「相変わらずの美男美女カップル、素敵だわあ……」

「美夜：顎痛い」

太一の訴えはあっさりと無視された、それどころか首を絞められている。

頑張れと心の中で声援を送り、目の保養にしておこうと皆に倣って校庭に視線を寄越すと偶々副会長も顔をこちらに向けた。

一瞬視線が合った……：……ような気がした。

『……た……ど……に……る……？』

「は？」

突然頭の中に聞こえてきた声に思わず声をあげると、顔面蒼白で瀕死の太一がどうした？とこちらを見た。

どうしたは、お前だ。

美夜は相変わらず腰に手を回して副会長をエスコートしている会長の二人を穴があくほど見つめている。

それから太一の顔を覗き込むと、ふうとやたら長いため息をついた。

「太一もあのくらいしてくれたらいい」

「ぜった……い……に、いや……だ……！」

即答で否定した太一の首をさらに締めあげる美夜みて、今度は俺がため息をついた。

同情するよ、太一君。

俺だって絶対に嫌だ、俺の場合やってあげる相手がないのでそれ以前の問題だが。

会長と副会長がいなくなると、さっきまでの騒ぎが嘘のように静まり、窓際に集まっていた連中も各々の好き勝手な場所に戻っていった。

美夜もそそくさと自分の席に戻り、学生鞆の中の荷物を机の上に出

している。

辞書が4冊出てきた。

「電子辞書を買うという選択は無いのか？」

「まだ使えるのに勿体無いでしょ？それに電子辞書高いし」

「……………うん、そうだな」

午後の授業は、お昼を食べ天気も良くてしかも窓際で教室は冷房も入って室温は快適、おまけに現在の授業は社会科でゆっくりとしたしゃべり方が特徴のじいさん先生。

この状況で寝るなど言うほうが酷だ。

そんな訳で俺は授業中であるにも関わらず惰眠を貪っていた、食後すぐに寝ると牛になると言い始めたのは一体誰なんだろうか。

しかし俺の惰眠はあっさりと邪魔された。

「恭一、起きろ、当てられてるぞ！！」

「んあ？」

太一に頭をどつかれ渋々顔をあげると、先生が不気味な笑みを浮かべながらこちらを見ていた。

凄く…嫌な感じの笑みだ。

「高崎君、教科書の56ページ最後まで読んでくれるかね？」

「……………」

当然拒否することは出来ないわけで、仕方なく教科書を開くと指示されたページを読み始めた。

読みながら教室内を窺うと俺以外にも寝ている奴が半分くらいいる。なのに何で俺があたったのか……今時珍しく髪を染めてるわけでも、制服を変に着崩している訳でもなく、まさに格好だけは学生の鏡の

この俺が……。

心の中でぶつくさと文句をたれ、ようやくノルマを終えると、音をたてないように教科書を閉じた。

「運が無かったな」

さっそく太一が余計なひと言を言ってくる。

「うるせえよ」

再び寝る体制に入ろうとすると背中に悪寒が走った。

先ほどまでは感じなかったが微妙に肌寒い。

「なんかさみいんだけど、冷房の温度下げ過ぎじゃねえの？」

「んなわけないだろ、エアコンの温度は全部中央で管理されてるんだぜ？ 28度以下にはならないはずだ」

「お前寒くないのかよ」

「寒くないけど」

小声で寒いだの寒くないだの、南国に帰れだ北極に帰れだ言い争いをしていると、突然廊下の窓ガラスが一斉に割れた。

寝ていた者全てが起き、一部の女子が悲鳴をあげ、先生もあわてて教室のドアを開けた。

「おいっ、何が起きた!!」

「美夜!!」

「落ち着きなさい、皆さん落ち着きなさい!!」

先生が騒ぐ生徒を落ち着かせようと怒鳴るが、先生も生徒もパニックを起こしまるで効果が無い。

さらに続いて反対側の窓ガラスにもヒビが入り、それを見た俺は美夜を抱きかかえる太一を頭で考えるよりも先に無理やり床になぎ倒していた。

直後にガラスが勢いよく吹き飛び、教室にガラスの雨が降り注ぐ。ギリギリで避けた恭一たちはほとんどガラスを浴びずにすんだ。音が鳴り止んだのを確認し頭をあげると、まさに惨劇だった。ガラスの破片でほとんどの生徒が流血していた。

その有り様に美夜に見せないように太一が美夜の顔を自分の胸に押しつけている。

「何がどうなってるんだよ」

「俺が知るかよ」

苦虫を噛み潰したような顔で呟いた太一に恭一が答える。

現状を理解できない。

頭が追いつかない。

背後で何かの気配を感じた。

体が勝手に動き、太一の制服の襟を掴むと横に跳ぶ。

立っていた場所に目をやると、黒い塊がそこにあった。

また女子生徒が悲鳴をあげた。

赤く光る二つの点がこちらを向く。

「落ち着きなさいと言ってるだろう、何をしている高崎」

「先生、”それ”が見えないのかよ!!」

「見えてないのは君たちだろう。君はこの状況が理解出来ないのかね、この床に散らばっているガラッ」

鮮血が散った。

スローモーションのように倒れる先生。

息を飲む声、悲鳴。

そして浮かびあがる黒い3本の爪のようなもの。
それが先生の体を切り裂いたのだ。

一瞬の静寂、再び恭一たちに向く赤い一對の光。
再び考えるよりも先に体が動いた、転がっていたイスを掴むと黒い塊に向かって投げつける。

それが合図になったかのように、一斉に教室にいた生徒が逃げだした。

「恭一!!」

太一も美夜を連れ逃げようとして、その場から動かない恭一に気付いた。

「何やってる逃げるぞ!!」

「逃げ場なんて無い」

「……何を言ってる!?!」

「だから逃げ場なんてないんだ」

イスを投げたとき黒い塊に当たったかと思われたが、何もそこに無いかのようにすり抜け、背後の机に当たった。

自分の目が信じられなかった。

そして本能的に感じた直観。

逃げ場は無い…………

第一話（後書き）

はじめまして、こんにちは。

連載小説を始めました。

拙いところもあると思いますが、暇つぶしにでもなったらいいな
と思って書いています。

よろしく願います

第二話

黒い塊が咆哮した。

爪のようなものが再び浮き上がり恭一に向けられる。

どうせ逃げられないなら……

「太一、お前は美夜を連れて逃げろ!!」

「お前を置いていけるわけないだろ？」

背後で太一が喚いているが、ほとんど耳に入ってこなかった。

この黒い塊から逃げ切れる自信は全くない、どうせ逃げられないならせめて時間だけでも稼ぎたい。

ただの高校生である俺がどのくらいの時間を稼げるのかは分からないが、それでもいいよりはマシだと信じてる。

すると背後から「バカ野郎」という怒声が聞こえ、直後黒い塊を殴り飛ばす小さな塊が視界に入った。

美夜だ。

「何やってるんだ!!」

視界の隅に床に無残に転がった黒い塊を入れつつ、美夜を怒鳴りつけた。

怪我はないようだが、運悪くあの爪に引っ搔かれでもしたら、一生悔やんでも悔やみきれない。

しかし、飛んできた拳に思考は中断された。

「何やってるのはあんたでしょうが!!」

きれいに吹っ飛び、太一に起こされる。

美夜が俺の前に仁王立ちになり、胸倉を掴まれた。

「時間稼ぎとか、勝手なこと考えてんじゃないでしょうね?!! 勝手な行動して、勝手に死なれたら、こっちが迷惑なのよ!!!」

「それでも3人で全滅するよりかはマシだろうが!!!」

「そういうことを言ってるんじゃないっ」

再び美夜が振り上げた拳が視界に入った瞬間、廊下からまた悲鳴が響いた。

慌てて廊下に出ると、直視出来ない光景が広がっていた。

無数の黒い塊が生徒や先生を見境なく襲っていたのである。

ある者は八つ裂きにされ、ある者は食い殺され、そこら一体鮮血や肉片で酷い臭いが漂っていた。

これは本当に現実なのだろうか、いつの間にかマンガや小説の中に迷い込んでしまったのではないだろうか。

そんな考えさえ浮かんだ。

夢なら覚めてくれ。

願っても叶いそうにない現実。

黒い塊たちが恭一たちを見つけた。

他の教室を襲っていた黒い塊まで、廊下に出てきて恭一たちを観察し始める始末である。

じりじりと3人は後退した、圧倒的に数が多すぎる。

その時、美夜がガラスを踏んだらしく滑って態勢を崩した。

それを合図にしたかのように一斉に襲いかかってくる黒い塊たち。

「ウソだろ!!!」

「もういやああ!!!」

美夜は叫ぶと何を思ったのか、床のガラスを素手で掴むと一心不乱に投げつけた。

混乱して狙いが定まらないのか、中々それは黒い塊に当たらなかったが、そのうちの一つが黒い塊に深々と突き刺さったのを恭一は見逃さない。

「こいつら……」

「どうした？」

冷静に考えれば分かるはずだった。

こいつらの体は物体をすり抜ける、それはさっき投げたイスではつきりとした。

なのに、ガラスは刺さった。

そして床に散らばるガラス片。

そしてもう一つ。

恭一は恐る恐る倒れている先生を仰向けに起こすと、自分の考えに間違いが無いことを悟った。

「太一、美夜！！そいつら、ガラスと生身なら触れることが出来るぞ！！」

「マジかよ！！」

「ああ、先生だけが切られてる。だが、服には切られた跡が全くない。それと、さっき美夜が投げたガラスがそいつらに刺さった」

言いながら落ちていたガラスを掴むと黒い塊に投げつけた、手が切れるとかそんなことはどうでもいい。

死ぬことにくらべたら、そんなことは些細なことだ。

なんとか冷静さを取り戻したらしい美夜も今度は確実に黒い塊に向かって投げている。

突然の反撃に黒い塊は後ずさり、そして見えなくなった。

「助かった……のか？」

静まりかえった教室。

ヘナヘナとその場に座り込む。

しばらくして不思議な高揚感に襲われた、自然と笑みが漏れてしまう。

自分でも今の自分が何でこんなことを感じるのか理解できない。

クラスメイトの死体が転がっているその真ん中で、自分は一体何を考えているのだ。

ついに自分でもわからない間におかしくなってしまったのだろうか。己の感情をコントロール出来ず戸惑っていると、突然入った放送にビククリして机に頭をぶつけてしまった。

【生き残っている生徒の皆さん、生徒会長です。正体不明の何かが我が校を襲っていますが、我々生徒会が掃討作戦を現在行っております。奴らはガラスを恐れ、生身しか触れることが出来ません。我々が救援に向かうまでの間、教室の中にて籠城をお願いします】

「今更かよ……」

教室の惨状を目の前に力なく呟いた、一体何人の人間が死んだのか。窮地を脱し状況を冷静に判断すると、酷い臭いで嗅覚がマヒしていることや、その他諸々非日常の中に自分が座っていることなど、色々なことが目に見えてきた。

「とりあえず、太一と美夜はそこら辺のガラスを集めてここで籠城してくれ。俺は生存者を集めてくる」

「あんた一人でいくつもり!？」

「まだ他の教室には生きてるやつがいるかもしれない」

「そんなのあたしひとりで守れる!！」

「応急処置をしながらか？」

「それは……」

さすがにそれは体が二つはないと出来ない。

恭一はなるべく長く鋭利なガラスを掴むと、落ちていたガムテープでそれを腕にしっかりと固定した。

「お前は大丈夫なのか？」

その様子を黙って見ていた太一が問いかけてくる。

「深く踏み込まなければ大丈夫だろう、文武両道な生徒会様も動いてくれるみたいだし」

「気をつけろよ」

「………ああ」

しっかりとガラスが動かないことを確認すると、ドアとしての意味も原型も無いドアを避け教室の外に飛び出した。

思いのほか酷い有り様に愕然とした。

どう見ても踏みつぶされたと思われる頭部や千切れた腕、中身の出た胴体など、途中何度か廊下の隅で吐いた。

吐くものが無くなっても、それでも吐いた。

それでもしないと、前に進めない気がしてならない。

しかし不思議なもので慣れてしまうと、そのうち吐き気は感じなくなっていた。

どうしてここまでしようと言う気になったのかは分からない。

さっきは二人に生存者を助けると言ったが、本心を言うと思けると言うより、さっきの黒い塊を倒しに行くと言ったほうが正しい。

さっき感じた高揚感、そして……。

腕に括ったガラスを見た、そこに映る自分の顔を見ると無表情だ。それがまた気に食わなかった。

結局、この階の廊下に黒い塊の存在は確認出来なかった。気付けば校舎内も静まりかえっている。

仕方なく戻ろうと思い廊下の曲がり角に差し掛かったとき、突然首を掴まれた。

「放送は聞こえなかったのか？」

酷く冷たい低い声が下から聞こえた。

目線だけ下にやると、副会長がガラスを恭一の喉元に突きつけていた。

美少女にこんな形で迫られるのもいいかもしれない……。

こんな状況で能天気だと自分でも思う。

「聞こえましたよ、ただ他にも生きている人がいるなら複数のほうがいいと思って」

怒られるかなあと考え、それでも信じて……と必死に目で訴えていると「そうか」とひと言返事が返ってきた。

「他に生存者は？」

解放された恭一は首が無事か確認すると、太一たちを残してきた教室の方向を指さした。

「俺の他にまともに動けるのは後二人、辛うじて生きてるのが数名です」

「分かった」

「……………あのっ」

短い返事のあと無言で通り過ぎようとする、副会長を無意識に呼び止めていた。

無視されるかな？と思ったが、ちゃんと振り向いてくれた。

「現状が理解出来ないんですが。それにこれだけの騒ぎで、なんで警察や救急車どころか、近隣も騒いでるようには見えないのはどういうわけですか？」

「詳細は後で説明してやる。それで納得出来ないなら、簡単に言う」と現在この学校は外部と切り離されている」

「はっ？切り離されてるって……。あつ、ちょっと副会長、待ってください！！」

ずんずん一人で進んでいく副会長の後を追ひ、教室の前に来ると残してきた二人が同時にこちらを見た。

「ふっ、副会長！？」

「現在生存者は皆体育館に集めている。背負えるだけ背負ってついてこい」

「はっはい！！」

二人は慌てて立ち上がり重傷な者を優先して背負った。

見ているだけかと思われた副会長も手近にいたものを背負っている、ちょっと驚いた。

それを不躰に眺めていたのを不快に思ったのが、ギロッと睨まれ慌てて視線をそらす。

『……ない……し……かん……いな……』

頭の中に声が響いた。さっきと同様にうまく聞き取れない。

当然あたりを見渡してみるがそんなことを言ったと思われる人間を見つけることは出来ず、「置いてくぞ」という太一の声に慌てて教室を出た。

所々崩れかかっている廊下や階段を下り、少し離れた体育館に近づくにつれて合流して人が多くなる。そして中に入ると150人ばかりの人が集められており、その半分以上が床に寝かせられており、それ以外は泣き崩れていたり、怪我の手当てに追われていたりした。全校生徒は約500人、約3人に1人が生き残った計算になる。だが、動ける人間はさらにその半分。かなり酷い状況だ。

「こんなものを見てもお前は冷静なんだな」

突然横から話しかけられ声の主を見ると、感情の読みとれない表情でこちらを見ていた。

「状況が理解出来なくて反応出来ないだけですよ」

「……そうか」

そのまま副会長は会長の姿を見つけると、無言で立ち去ってしまった。

残された恭一たちは適当に空いてる場所を見つけると、そこに背負ってきたクラスメイトを寝かせた。

しばらくして白い布を持ってきた上級生と思われる生徒がやってきたが、薬も包帯も何もかもが足りない状況らしく、これで傷口をきれいにしと言ってすぐにどこかに行ってしまった。

俺はふと思った疑問を口にする。

「何で大人が一人もないんだ？」

「社会科のじいさんはあれが見えてない感じだった。……まさかそのせいで全滅とか……」

「嫌なこと言わないでよ」

美夜が太一の腕を掴み捻りあげる。

その力、今ここで使うものではないと思う。

恭一は立ち上がるりフラフラと体育館出口に近寄った。

「どこいくの!？」

美夜も倣って恭一の後をついてくると、太一も置いていくなとついてきた。

「他にも生きてる奴がいなか探しに行くんだよ。このままあそこにいってもしょうがないからな」

「それもそうだね。なんかあの化け物もういないみたいだし。」

「クラスにも何人か置いてきちゃったしなあ……」

「そうだね、先にそっちをゆうせっ」

美夜の口を恭一はふさいだ。

ついでに急に立ち止まったので、その後ろにいた太一が美夜に激突する。

美夜が抗議の目を向けてきているのを感じたが今は無視だ。

誰かの話し声がしたのでそういった行動を取ったのだが、どうやら会長と副会長らしい。

場所は校舎の外れで人はあまりこない、教室にいくにはここが近道だと思って通ったのだが、どうやらとんだ場面に出くわしてしまったようだった。

第三話

「自分が何を言ってるのか分かってるのか!？」

「分かっているから言っている。これ以上のことは我々の手には負えない、外部との空間を完全に隔絶されている以上現状を生徒に公表すべきだ」

「そのうえで招かれた混乱はどう対処するんだ」

「起きてから考える」

「それじゃあ遅すぎる」

どうやら言い争いをしているらしい。

しかも会話の内容からこの二人が現在の状況を完全に把握していることが窺える。

恭一の下から顔を出して覗いていた太一が「このまま去る？」と上目使いに聞いてきた。

男の上目使いは別に可愛くも何ともないと思った。

「でもさあ、ちょっと好奇心も疼くよねえ」とさらにその下の美夜も上目使いに聞いてくる。

見た目は可愛いが、中身を知っているせいか何も心に響いてこなかった。

ちなみに現在下から美夜・太一・恭一の順にトータムポール状態で盗み聞きをしている真っ最中だ。

恭一が答えずにいると、美夜と太一が二人の間でどうするかと議論が白熱し始め、そして

「誰だ!!」

見つかってしまった。

眼下で驚いて太一が美夜にのしかかるようにバランスを崩すのを無

視し、おとなしく姿を現すと会長が驚いた表情をした。

「痴話喧嘩は他所であることをお勧めしますよ」

「余計な御世話だよ。ええと……」

「高崎です」

「ああそうか、高崎君」

場を取り繕うかのように咳払いをした会長をさっそく突いてみる。

「状況を教えて欲しいんですが」

「それは出来ない、と今ここで話していたのは聞いていなかったのか？」

「聞いてましたよ。だから聞いてるんです」

「高崎君、君は自分で自分の言っていることが理解出来てるか？」

「出来てますよ」

「だったら君の頭はおかしっ」

「修也……」

冷静な声が響いた、副会長だ。

修也というのは会長の名前だったかなあ、と辛うじて残っていた入学式の記憶から推測する。

「彼らはほぼ無傷で生還していた。その能力を認めて状況を話してもいいと思う」

「それとこれとはまた別問題だ」

「でも我々だけで解決できるものではないと、さっきから再三言っている」

「だからって力のない彼らに一体何が……」

完全に蚊帳の外だと思う。

恭一たちを置いて再び痴話喧嘩を始めた会長と副会長。

そして足元では太一が美夜に殴られていた。

この状況、ため息しか出ない。

どうしようかと考えあぐねていると、また頭の中に声が響いた。

『見つけた。今度は逃がさない』

はっ？

今度ははっきりと聞こえる声。

他の4人を見てもどうやら今の声が聞こえたのは恭一だけらしかった。

空耳にしては嫌にはっきり、しかし誰かが言ったにしてはどうも周囲の様子がおかしい。

気のせいということにして改善の余地が無いこの場を去ろうと足を一步踏み出した時だった。

「うおっ!？」

何かに足を掴まれバランスを崩した。

「恭一!？」

それに気付いた太一が恭一の腕を掴むと美夜もその上から掴んできた。

まだ何かに掴まれている足元を見ると、目を見張ってぎょっとした。自分の影から黒い腕が伸び、しっかりと足首を掴んで離さないのだ。そしてどんどん自分の影の大きさが広がり体が飲みこまれていく。

「高崎君!！」

気付いた会長と副会長も助けに来てくれるが、さらに腕の本数が増え、太一と美夜も影の中に引きづり込まれようとしていた。

「違う、彼らは関係無い!!」

会長が影に向かって叫ぶ。

大きさを増し伸びてくる腕。

捕まる会長と、助けようとする副会長。

そして体のほとんどを飲みこまれた恭一たち。

恭一が最後に見たのは、澄み渡る青い空だった。

蒼穹とはこのことを指すのだろうか。

意識を取り戻した時に最初に目に入ったものを見て思った感想だ。

一面の曇りの無い青い大空。

体を起こすと覆い茂る草の中に横たわっていたらしい。

当たりを見渡すと固まって影に飲みこまれた4人が転がって寝ていた。

とりあえず一番手近に寝ていた太一の頭を一発どつくと、奇声をあげて意識を取り戻した。

残りの3人もその声で意識を取り戻す。

「どこ…どこ…?」

立ち上がった美夜が辺りを見渡して呟く。

どこまでも続く青空、その下に広がる終わりの見えない草原。

そんなところに恭一たちは寝かされていた。

「デルタドール」

不意に呟くようにして聞こえてきた声、発信源は会長だ。

「この世界の名だよ」

「どういふことだ」

「地球ではない世界。我々が昔住んでいた世界」

「それって…まさか…あの世？あたしたち、死んだの？」

美夜が怯えたように聞いた。

しかし副会長は静かに首を横に振る。

「我々二人はもともとこの世界に住んでいた。訳あって地球に渡っていた」

「つまりここは俺たちが住んでいた地球ではなく、要するに異世界ってことか」

「そういうことだ」

嫌な展開だ。

これからこの気の遠くなるような草原を抜けて地球に帰る方法を探さなくてはならない、そういうことになるんだろう。考えただけで気が遠くなりそうになる。

「帰る方法はある。僕たちが地球に行った方法を使えばね、ただし場所が問題だ」

「危険な場所なんですか？」

「かなりね。それに多分ここからかなり遠くにあるはずだ。」

「……そんな」

美夜の目から涙が零れる。

太一が美夜を抱き寄せると、埋もれるようにして美夜が嗚咽をこぼした。

はつきり言って状況は絶望的だ、生きて帰れる保証がどこにもなかった。

恭一は拳を地面に叩きつけた。

「そおんなに、絶望することはないと思うわよん？」

突然聞こえてきた甘ったるい女の声。

全員が顔をあげるとどこから現れたのか、口元に笑みを浮かべた白衣姿のやたら胸がでかいメガネの女が立っていた。

どっから見てもいろんな意味で危ない感じのお姉さんだ。

副会長が無言で、しかし素人にも分かるほどの殺気を立てて恭一たちの盾になるように立った。

「警戒すしないでえ、って言うほうが無理っぽいわねえ」

「久しぶりですね、デイスティル。相変わらずだ」

「貴方は向こうに行ってたせいで見違えるようよお、ランデル。中身は相変わらずのようだけどお。それに、貴方が連れ出してくれたレイちゃんも、すうっかり人間っぽくなっちゃってえ。いやあねえ……」

会長をランデルと呼んだ女デイスティルは、舐めまわすように副会長を見ている。

その目が酷く吐き気をもよおすものだと、直観で感じた。

俺はこの女を知っている。

「安心してねん、帰るために必要なものは全部揃ってるわん」

そういつてデイスティルが指を鳴らすと、青空と草原が一瞬にして消えた。

代わりに現れたのは黒い金属質の部屋だ。

そして、恭一たちの周りを無数の黒い兵士が銃口をこちらに向けて立っていた。

背後で怯えて震える美夜を強く太一が抱き締める気配がする。
まさに絶体絶命。

「帰す気は無いけどねん？」

「こっちの3人は関係無いだろ！！」

「いやだあ、ランドルなら分かるでしょ？せつかく異世界の生命体の貴重なサンプルが3体？いえ、5体も手に入るかもしれないっていうのに、なあんでそれを見す見す帰すような真似をしなきゃいけないわけえ？」

「ふざけるな！！」

恭一は自分の目を疑った。

怒声を上げた副会長の腕がみるみるうちに異形に変化し、ディステイルに襲いかかったのだ。

「葵、止めろ！！」

「下等種のくせにうるさいわねえ」

副会長の腕がディステイルに当たる瞬間、兵士が一斉に発砲し、副会長の体を貫いた。

肉が抉れ、臓器が飛び散り、副会長はその場に崩れた。
女の高笑いが響く。

「いやあああああああ！！」

美夜が叫び、発狂して、太一の制止を振り切るとディステイルに殴りかかった。
しかし寸前で美夜の体が崩れる。

美夜が崩れて現れたディステイルの手には銃が握られていた。倒れた美夜から広がっていく赤い水たまり。

「止めてよお、サンプルは出来れば傷つけないのにい」

そういつて美夜の頭を蹴るディステイル。

「このアマア!!」

それを見た太一がディステイルに飛びかかろうとするが、恭一の横を通り過ぎるか否かのところで、兵士の一発の銃弾の前に崩れた。

「はあ、とんだ学習能力の無い生物ねえ。がっかりだわ……」

「ディステイル……お前……」

ため息をつくディステイル。

激昂する会長。

恭一は現実が理解出来ないでいた。

眼前には無残な姿で転がる副会長と血溜まりの中の幼馴染み美夜。横には辛うじて呼吸をしているのがわかるが、目を開く気配が無い幼馴染み太一。

ふと、床についていた手が何か触った。

否、何かが触れてきた。

それは徐々に触れる面積を増やしていく、生温かい。

視線を手元に落とした。

黒くて暗くて分らない。

手を動かすと、ピチャツと液体の音。

しかし漂ってきた鉄の臭いが、その液体の正体を暗示している。

恭一は自分の手を見る。

茫然自失とはこのことだろうか。

「あらあ、坊やどうしたのお？ 無様な仲間の姿にビクリしちゃった？」

さっきまでは動いていたのに、今は自力で動く気配が無い。
不思議だ……。

人間とはなんて弱い生き物なんだろうか……。

「もうそんなにならなくてもいいじゃない。貴方はあたし好みだし、抵抗しないからコレよりも優遇してあげるわあ。」

何故だろうか、感情が湧かない、否、理解出来ないのか？
悲しみか、苦しみか、怒りか、憎しみか。

現実を直視したくないから脳が感情を制御しているのか。

逃避、これは現実からの逃避。

受け入れたくない逃げ出したい、これは紛れもない現実。

壊れてしまいたい。

壊れてみようか。

いや……、いっそ壊そう。

そう考えて、笑みがこぼれた。

「高崎君!!」

最後に聞こえたのは会長が必死に俺の名前を呼ぶ声。

最後に見えたのは眼下に広がる人が住んでいるであろう街並み。
意識はそこで途絶えた。

第三話（後書き）

やっと異世界にトリップしてくれました。

これからどんどん中2くさくなっていきます。

しかし救いがないですね
ρ ^

第四話（前書き）

すいません、三話追記しましたm
ご迷惑をお掛けします
〔
m

第四話

次に意識を取り戻した時、まず粗末で今にも崩れそうな天井が目に入り、続いて粗末な布団の上に寝かされていることを理解した。あまりにも粗末過ぎてそれが布団なのかどうか定かではないが、とりあえず寝かされていたのだから布団ということにしておこう。起き上がると体の節々が痛んだ。

そして意識を失う前の記憶が蘇る、血濡れて倒れた幼馴染たち。恭一は頭を振ると意識からその記憶を意識的に消した。

今はさっきとはまた違う状況を知るのが先だ。

外れそうな扉を明けると、すぐ横の扉から声が漏れてくる。耳を近付けた。

「べる……がで……なばくは……おき……らしわ。それ……ゆ……えふ……いだった……デルはか……もぐう……み……ったとか」

「ええ！？それってホントなの？」

「こらっ……こ……が……い。おこし……た……どう……の？」

「ごめ……な……い」

恭一はヒソヒソ話に入っているのかと思ったが、このままここに突っ立っているのもどうかと思ったので、深呼吸して扉を開けた。が、思わず息を飲んでしまった。

「あらっ、起きちゃったの？ごめんなさい、声が大きかったわね」

目の前にいたのは壮年の女性と幼い女の子だったが、その全身は顔や手のひらなどを除いて青黒い鱗に覆われていた。

世に言う亜人というやつだろうか。

恭一が驚いた顔をしているので女の子がどうしたの？と顔を覗いて

きたが、その目は白目の無い青だったので、思わず身を引いてしまった。

「鱗族を見るのは初めてかい？」

壮年の女性、おそらく女の子の母親が恭一の様子を見て聞いてきた。

「りんぞく鱗族？」

「そう鱗族。私たちがみたいに、体に鱗があるものを総称して鱗族って言うのさ。その他にも牙族・羽族・爪族がぞく うぞく そうぞくっていうのがあるよ。特徴が種族の総称になっているのさ」

「わかりやすいですね」

「……そういうあんたは不思議だね、身なりはヒトなのに纏う雰囲気は全く違う、邪なものを全く感じない」

邪なものが全くないかどうかは分からないが、雰囲気が違うのはしようがない、なんせここでの異世界から来たのだから。

とりあえず、彼らが自分に危害を加えるつもりはなさそうなのでその点に関しては安心した。

「先程は何の話をしていたんですか？」

「ん？ ああ、ベルデルガで大規模な爆発があったのさ。その時に行方不明だったランデル博士も見つかったらしい」

「ベルデルガ？」

「知らないのかい？ ヒトが作った巨大な都市さ、ヒト以外で近づく者のいない不気味な所だよ。ここからはかなりの距離がある、そうさねえ馬車を使い継いでどのくらいになるかなねえ……」

「……俺は何日くらい眠ってました？」

「丸々3日だよ、呼吸はしてるのに起きる気配が無いから心配したよ」

3日前の情報がここまで伝わってきている。

馬車でどのくらいかは分からない距離らしいが、情報伝達速度からしてそこまで遠いとは思えない。

記憶に幽かに残っている眼下に映る街並み。

ランデルという名前が出たということは会長は生きていておそらく恭一たちが飛ばされた場所、そしてその街を爆発させたのは……俺？

目の前で倒れていった仲間たち、彼らは無事なのだろうか。

会長は無事らしい、だったら同じ場所にいた彼らも無事であると願いたい。

ふと湧いた疑問……

「それであんたは何者なんだい？」

『……俺は…何者なんだ……。』

「分からないのかい？名前も…？」

「……恭一」

「変わった名前だね。この世界の生き物ではないみたいだ」

あまりに自然と出てきたその言葉。

危うく受け流してしまうところだったが、寸で踏みとどまった。

「この世界の他にも世界があることを知ってるんですか？」

「あるらしいってことは知っているよ、その存在は確かなものじゃないけどね。何年か前までベルデルガでランデル博士やディステイル博士が中心となって外の世界を探索研究をしていると聞いたことがあるよ。ここだけの話、ランデル博士が行方不明だったのは、その外の世界に行っていたからなんじゃないかって言われてる。爆発

もランデル博士が発見された日と同じだから、何か関係があるんじゃないかってね。……まさかあんた、外から来たのかい!？」

その返答に曖昧に答えると女性が呆れたように深いため息をついた。どう捉えようと彼女の自由だ。

沈黙が生まれた。

女の子が不思議そうにこちらを見上げている。

何となく頭の上に手を乗せて撫でてあげると、気持ち良さそうにされるがまだまだ。

小動物みたいで可愛い。

しかし静寂を破るかのように、突如外から悲鳴が上がった。

そして扉が壊れんばかりの勢いで開けられ、これまた全身鱗に包まれた男が立っていた。

「メイ、逃げろ、『陰』だ!!」

「そんな、まさか!!」

メイと呼ばれた女性が呆然としている俺と女の子の腕を掴むと外に飛び出した。

直後に背後で家がバキバキという音を立てるのが聞こえる。

振り返ると黒い塊、そう学校を襲った黒い塊が巨大な爪をこちらに向けて、押しつぶした家の上で威嚇していた。

全身の血が沸騰しそうになるのを感じる。

「くそっ、なんでここ最近は無かったのに……。ってあんちゃん、ヒトか!？」

今更恭一の存在に気付いたらしい男が警戒の目を向けてきたが、黒い塊が咆哮したためすぐに注意が逸らされた。

また悲鳴があがった。

顔を向けると黒い塊が爪で鱗族を串刺しにして投げ捨てる場所だ
った。

あれじゃあ助からない。

どこか冷静な脳が考える。

しかし注意を逸らしたのがいけなかったのか、視界の端に目の前の
黒い塊が襲ってくるのが見えた。

ほとんど反射的に傍に立って泣いている女の子を抱きかかえると横
に跳んだ。

大きく抉られる地面。

あがる悲鳴。

恭一は近くに立っていた鱗族に女の子を押し付けると、再びこちら
を襲おうとする黒い塊に向かって拳を振るった。

爆散する黒い塊。

息を飲む声。

仲間が散ったのを見た黒い塊が恭一の周りに集まり、警戒するよう
に周回し始める。

いくらなんでも数が多すぎた。

そのうちの3頭が一斉に襲いかかってくる。

避けきれない。

今度こそ死ぬ。

そう思った瞬間、何かが飛び出しあっという間にその3頭を叩き切
った。

ゆっくりと立ち上がる何か、鱗族の男。

恭一よりも少し背が高いくらいだが、その体は比べようもない。

がっしりと鍛え上げられたその体は傷だらけで、どのくらいの死線
を越えてきたのかを物語っている。

そしてその手に握られた大振り剣。

再び襲ってきた黒い塊を片手で握った大剣で切り裂く。

背後から襲いかかる黒い塊、気付かないのか？

恭一が助けようと飛び出す、男に爪が当たるか否かで何かがそれ

を貫いた。

巨大な槍だ。

続いて降ってきた矢も抜群の命中率で次々と黒い塊を襲っていく。
全滅するのにそう時間はかからなかった。

呆氣にとられた。

目の前で剣についた黒い塊の体液をふき取る男の存在が信じられなかった。

その隣に当たり前のように立つ女性の手にも大振りの槍が握られて
いる、さっきこの鱗族の男を助けた槍の持ち主。

背後で鈴が鳴るような声がした。

「リューラン、トリナ。もう気配は感じない」

振り返ると背中に羽を生やした弓を持つ少女と、やけに顔が整った
男が立っていた。

「帰ってきてくれたのか……」

誰かが呟いた。

その瞬間、それを合図にしたのかのように水を打ったように静まり
返っていたその場が一気に歓声に包まれた。

4人があつという間に村人たちに囲まれた。

何がなんだか分からない恭一はその場から逃げるように離れると、
小さな手が逃げる手を握ってきた。

見降ろすとさっきの女の子だ。

「きょうち、どこに行くの？」

青い目でこちらを見てくる女の子の頭にまた手を乗せて撫でてやる

と、にっこりとはにかんだ。
可愛い。

しかし突然黒い影が女の子を覆い、あっという間に引きはがされた。顔をあげると大剣を構えたリューランと呼ばれた鱗族の男が自分の背後に女の子を隠すようにして立っている。

「この子に何をするつもりだった」

何かをするつもりはない。

多少可愛いなあという下心的なものはあったのだが、それに気付かれたのだろうか？

「別に可愛いなあって思っただけで、特に何かをするつもりはっ」

「何もしないだと、しらばっくれるな！！ヒトの分際でこの村に一体何の用だ！！」

喉元に突きつけられた刃先、完全に首に触れているのが分かる、そして伝い落ちる液体。

ああ俺殺されるかも、と呑気にそんなことを考えていた。

「リューランさまやめて！！きょうちはあたしをたすけてくれたんだよ！！」

「助けただあ？ヒトが俺達にそんなことするたあ何か下衆なこと考えてじゃねえのか、ああ！？」

言い方はそこら辺の不良と大して変わらないが、とんでもない得物を持っているだけ性質が悪い。

短気は損気という言葉を教えてあげたい衝動に駆られた。

周囲は完全に静観を決め込んでいる。

「いやだから、本当に俺は何も」

「うるせえ!!」

怒鳴ると同時に大剣が振り上げられた。

人の話を聞けと言いたい。

女の子が恐怖で目を瞑る、それを見ながら名前聞いておけば良かったなあなんてことを考えた。

なんともあつけない最期だと振り下ろされる刃先を見て思った。

第五話

「子供の前ですることじゃないぞ、リユーラン」

目の前で鋭利な刃が音も無く止まった。

リユーランの腕をさっきのやたら顔がいい青年が掴んで止めたのだ。とりあえず今は助かったらしいのだが、子供がいなかったらやられていたのか？

「離せ！！」

「子供の前で」

「分かったから、離せ！！」

リユーランは握られた腕を振り切ると大剣を背中中の鞘におさめた。すると緊張が解かれたのか女の子が泣き出して恭一に抱きついてくる。

「ああらら、小さい子泣かせて、最低ねリユーラン」

槍を持った女性トリナがリユーランの肩に腕を乗せ、反対の腕で呆れたポーズをとりそんなことを言った。

近くでまじまじと見ると、口元から他の二人よりも2、3倍は長い牙が覗いている。

牙族の女性なのだろうか。

不躰に見過ぎたのだろうか、トリナが恭一に視線を向けた。

慌てて視線を逸らすと、首に指が這わされた。

驚いて身を固くするとクスクスと牙を覗かせて笑われてしまった。

「そんなに警戒しなくたっていいじゃない、別に捕って食べたりし

ないわよ」

そんな危ない牙を覗かせながら言われたところで説得力が皆無だ。ジロツと睨むとため息をついて「しょうがない坊やね」なんて言う。そんなにお子様に見えるのだろうか、高校ではこれでも後ろから数えたほうが早いぐらいの身長なのだが……というか、割と昔から年齢よりも上に見られることが多かった。

それから羽族と思われる少女を交えて4人は話し合いを始めてしまった。

村人たちは俺をこの4人に任せたのか、各々村の復旧作業を始めている。

そんな中、メイが駆け寄ってきた。

「大丈夫かい？」

「ああはい、なんとか」

気の抜けた返事だと思う。

「コレットは？」

「だいじょうぶ!!」

そうか、この子の名前はコレットというのか、覚えておこう。

「ごめんね、あんたその姿だからさ、簡単には受け入れられないんだよ」

「見れば分かりますよ」

村人の腫れものでも見るような視線はさっきからずっと感じている。なんだか疲れてきた。

この世界の人間じゃないと言って、どのくらいの者が信じるだろう

か……。

「擁護してあげたいのは山々なんだけど、出来ないんだよ、あたしにあの4人の決定に異を唱えるだけの力は無い」

「そうでしょうね」

さっきのあの4人に対する村人たちの反応を見れば予想はつく、それにコレット見たいな幼い子供までもが「さま」をつけて呼んでいた。

「だからさ、今逃げちまいなよ」

「……何を言ってるのか分かってますか？」

「分かってるよ、あたしでも人質として時間を稼ぐくらいは出来るだろう？」

笑顔で言うメイに目眩がした、しかもなかなか治まらない。

その後自分がどうなるか分かっているのだろうか、それに人質を優先するという保証がどこにあるというのだ。

「あなた危険すぎる」

「いまは自分の身を心配しなさい」

そんなことを言われたところで、この世界では右も左も分からないのにどうしろと言うのだ。

頭痛がする、心なしか吐き気までもよおしてきたみたいだ。

そして……

世界が暗転した。

「起きろよ恭一、当てられてるぞ!!」

気持よく眠っていたのに頭部を叩かれて強制的に現実に戻された。

顔をあげると太一と、微笑みを浮かべた社会科教師が目に入る。

何でまた俺が……。

仕方なく支持されたところを読み、終わると再び寝る態勢に入った。

「お前はいつも寝過ぎなんだよ、家で寝てんのか？」

昼休み、いつも通り屋上で太一と美夜と昼食を食べていた。

「寝てんに決まってんだろ、毎日9時間は寝てる!!」

「バカいちは昔からよく寝るよねえ、だからそんなにニヨキニヨキ伸びるんだよ。それでいて成績は中の上なんだから羨ましい限りだわ」

「太一なんていつもトップじゃねえか、俺は逆にお前のバカを疑うね」

「うるさい。いつまでたってもあたしに喧嘩で勝てない癖に!!」

「お前の存在がチートなんだよ、剛腕女」

「んだとコラッ!!」

言ってる傍から鉄拳が飛んできた。

軽く避けるが、反対の手で制服の胸元を掴まれると殴った勢いそのままに引き倒されてしまった。

背中を屋上に強打する。

「いってええええ!!!!!!」

「ざまあみな」

「……………今日も空は青いなあ」

今日も今日とて美夜には勝てず、太一は見て見ぬ振りを決め込んでいる。

いつもの光景だ。

その後も何度か美夜に襲いかかつては返り討ちにされ、時間が来てしまった。

また退屈な授業の開始だ。

放課後

とくに部活に入っているわけでもない俺たちは、各々特に予定が入っているわけでもないので教室内でダラダラしていた。

「お前らさあ、仮にも付き合ってるんだからさ、放課後デートとかそういう青春を謳歌しようって気にはならないのか？」

「いや別に今更……」

「毎日会ってるし……」

実に気の抜けた返事である。

しょうがないと言えましょうがないのだが。

家が近所だった3人は幼稚園に入る前からの付き合いだ。

それからずっと小・中・高と同じ学校で、クラスこそ分かれたりもしたが再びこうして同じクラスになっている。

正直顔を見飽きたといっても過言ではない。

じゃあ何でこいつらは付き合っているのか……永遠の謎だ。

くだらない、早く帰ろう。

呆れて自分の鞆を手にとると、「じゃあ俺らも帰るか」と太一と美夜もこそそと帰宅の準備を始めた。

お前ら……。

上履きを履き替え校庭に出ると、ちょうど会長と副会長を取り囲む一団が目に入った。

顔が良い二人はまるでアイドルだ、全くもって傍迷惑極まりない。

「相変わらずかっこいい……」

うっとりとした声をあげているのは美夜。

何を隠そうイケメン会長のファンクラブに入っているらしい。

太一、同情するよ。

「ああもういいからさっさと帰ろうぜ」

嫉妬心か、軽くイライラした声をあげて太一が美夜の腕を引っ張った。

「いいじゃんちよつとくらい。それに副会長だって目の保養になるでしょ!!」

「いやまあそれはそうだけど……」

太一、前言撤回だ。フォロー出来ない……。

しかし美夜も美夜だ、自分の彼氏に他の女を目の保養にするようするよう勧めるとは。

こいつら本当に付き合ってるのか疑いたくなってくる。

グダグダしながら校門までの道があるいていると、会長と副会長が近づいてきた。

「もしかして君たちは校内で有名な3人組みじゃないか？」

「「「はっ?」」」

きれいにはもってしまった。

なんだ校内で有名な3人って……。

いつの間にそんな噂が流れていたんだ。ていうか、こいつらと一纏めにされるとは不愉快だ!!

「人違いだと思いますよ」

「俊足の高崎、剛腕の三野、詭弁の雨宮。1年に化け物3人組みがいるっていうのを知らないのは、本人のあなたたちだけ」

化け物っていうのはいくらお顔のよろしい副会長でも失礼だと思うぞ。

ていうか、なんだそのいかにもマンガの登場人物ですといわんばかりの肩書は。

ほんとと面白くないが、美夜が剛腕っていうのはしっかりと他学年にまでバレているという点は面白い。

美夜を見るとブスっとした顔をしている。

太一は困ったような、笑っているような微妙な顔だ。

俺の足が速いのは主に美夜から逃げていたためで、太一の口が上手いのは美夜の宥め係だったからだ。

全部美夜が悪い。

「中々面白い噂ですけど、俺たち急いでるんで」

「あんなにのんびり歩いてて、普段君たちはどのくらいのスピードで歩いているんだい？」

「ああすいません、急いでるのは彼だけなんですよ。僕たちが頼みごとがあって引きとめてたんです」

詭弁っていうかただの嘘つきだ、こいつは……。

なんてことを前に言ったら、どっちも本質は同じだと言われた。そういうものなのか。

「そうだったのか。悪かったね引きとめて、ただ……」

笑顔だった会長の顔が曇った。

そして……。

『いつまで夢を見ているんだい？』

顔を歪ませドスの利いた低い声で会長が言った。

突然のことにびっくりして、後ずさりすると何かにつまずいて転んでしまった。

見ると血塗れの副会長が白目を向いて倒れている、広がる血液。

辺りを見渡すとさっきまでいたはずの太一と美夜がいない。

そう”さっきまでの太一と美夜”がいないのだ、いたのは……いや、落ちていたのは体を挟まれ苦痛に顔を歪ませた太一と美夜。

戦慄した。

顔をあげると、相変わらず顔が歪んだ会長が笑いながらこちらを見ている。

『急ぐ必要なんてないじゃないか、現実是不変なんだ』

ゆっくりと近づき、その手が顔に触れてきた。

体が動かない。

『君は知っているんじゃないか？』

「何を……だ。」

絞り出した声。

ニタァと会長が笑う。

『”全て”をだよ』

口が裂けた。

第六話

「あああああああああああ！！！！！！！！！」

「ぐがあっ！！！！！！」

二つの悲鳴が部屋内に響いた。

建物の造りがおんぼろであるためギシギシと音を立てている。

恭一は激しい息遣いと脈動を感じる、そして今見ていた夢を思い出
し頭痛で頭を抱えた。

平和だった日常、そして壊れて現れた非日常。

今はどっちが現実なのか。

顔を上げるとすぐそばで同じように頭を抱えているリューランが目
に入る。

「……何してんだ、お前」

思わず言葉を漏らすと、キッと顔を上げたリューランが激昂した。

「顔を覗こうとしたらお前がいきなり飛び起きるのがいけないんだ
ろー！！」

その言葉に背筋に悪寒が走った。

「……お前、俺に何するつもりだったんだ」

「馬鹿か貴様は！！うなされてるから様子をみてやろうとしただけ
だー！！」

この男にそんな優しさがあるのか甚だ怪しい、いくらなんでも説得
力が無さ過ぎだ。

警戒して後ろに下がると、「すっかり警戒されてんじゃない」とさも愉快という笑い声が部屋内に響いた。
トリナだ。

「あたしはトリナよ、その馬鹿はリユーラン。んで、こっちの爪族がクレイグ、羽族はナナリア」

「高崎恭一で…す…」

「タカサキキョウイチ？変わった名前ね、なんて呼べばいい？」

「……ええと、きょうい」

「キョイチ！！」

バンという音と共に扉が開くと、コレットが飛び込んできた。
手にお盆を持ち、その上には湯気が立つ器が乗っていた。
床に置くと器とスプーンを押し付けてくる。

「作ったの。美味しいよ、飲んで！！」

グイグイ押し付けてくるので断るに断れず受け取るとコレットは嬉しそうにはにかんだ。

「ああええと、お譲ちゃん。これから大事なお話があるからちよっと部屋から出ててくれるかな？」

リユーランが笑顔で、だがどう見ても引き攣ったものをコレットに向ける。

しかしコレットは恭一にしがみ付いてイヤイヤをした。

「おいつ、小娘。大人の言うことはおとなしっ」

「はあい、コレットちゃん。後でまた会えるでしょ、だから後にしてもえるかなあ？」

リューランの頭部に座って無理矢理黙らせると、トリナが諭すようにコレットに囁いた。

渋ったコレットだが何度もトリナに言われ、何度も恭一のほうを振り返りながら部屋から出て行った。

「どけっ!!」

「あんたホント子供扱い下手ね」

馬鹿にしたように鼻で笑われ、怒ったリューランがトリナに掴みかかり喧嘩になった。

呆然とその様子を見ていると、静かなそれでいて絶対的な声がある。

「早く先に進めないか？」

クレイグだ、微妙に眉間にしわを寄せて呆れている。

その後ろではナナリアがクスクスと可愛らしく笑っていた。

「あっああ……」

「ごめん」

急におとなしくなって二人はお互いから離れると、少し離れた場所にお互い腰かけた。

「悪かったな見苦しいところを見せて」

「いやっ別に……」

「ならいいんだが。まず君のこれからだが、殺すつもりはないが村からは出て行ってもらおう」

「……………」

「だがその前に、君がこの村に来る前のことを話してもらおうか。メイさんが君は異世界から来たと言っていたが、そう簡単には信じられないんでね。そんなものはあくまでヒトの世迷言として今まで我々の間では扱われていた」

「それでいい、だが俺も条件がある」

「なんだ……」

「村から出ていく代わりに情報が欲しい。この世界でみんなが当たり前に知っている情報だ」

「そのくらいなら全く構わない」

恭一は語り始めた。

前の世界での生活、幼馴染みのこと、突如襲われた学校、飛ばされた先での出来事。

ざっと話したのはこんなもんだが、4人は会長と副会長の話に興味を持った。

「ふーん、そのカイチョウってというのがランデル博士ねえ……」

「姿を変えたフクカイチョウってのも気になるな」

「突然現れた”陰”の存在もあれだな。もしかして、全部16年前と何か関係あるのか？」

「その可能性はありえるね。裏がありそうだな……、ここ数日で活発化する”陰”についても何か影響が……」

また完全に置いてきぼりにされてしまった。

恭一の話聞いてそれぞれ思案し、色々と意見を出し合っている。はあとため息をつくって、すぐそばでクスクス笑う声がし飛び上がる。振り返るとナナリアだ。

「ビックリした？ごめんね、皆ああなると周りが見えなくなるから。悪気は無いんだよ」

「そうなんですか」

答えるとまたクスクス笑い始めた。

「いやだなあ、そんなに固くならなくていいのに。普段どおりでいいんだよ、仲良くしようよ、私固い口調きらい」

「……………」

見かけは可憐な美少女なのだが、なんかいやな感じだ。

「それでね、恭一君。このデルタドールには神様がいたんだよ」

「脈絡が無いな」

突発的にまるで話の途中であつたかのように話し始めるナナリアに逃げ腰になりつつも、強引だが話を進めてくれるので、おとなしく聞いていようと姿勢を正す。

「黒神と白神の男神と女神なんだけどね、あつどっちが男で女かは知らないから。それでこの二つの神様は体を換えることで代わりするの。どうやって体を変えるのか、どうしてそんなことをするのか、果たしてそれが本当なのかもわからない。しかも目撃情報が曖昧すぎているのかすら分らない」

「随分といい加減だな」

「……………」。黒神は憎悪、全てを憎み壊す存在。何百年も前から規模を問わず争いが起こるたびに黒い陰が戦地を襲い、生き物の力とは思えない力で全てを薙ぎ払っていく。魔術の力と違って噂もあったけど、地形を変えるほどの魔術は生き物には使えない。そして、今回村を襲った”陰”はその黒神に係する何かって言われてる」

ナナリアの話は確かなものなのか、不確かなものなのか、かなり迷

う。

黒神が危ない存在ってことは分かったが。

「それで白神は？」

「白神は慈愛。全てを愛して癒す、黒神とはま逆の存在。大小関係無く争いが起こるたびに戦地に現れては生き物を癒す」

「……そこまで分かっているって何で目撃情報が曖昧なんだ。それと黒神とは対立しなかったのか？」

「代かわりする度に姿を変えるから例えはつきり目撃しても意味が無い、しょっちゅう行われるからね代かわりは。両者が対立したって噂は聞いたことがない、不思議なくらいにね」

聞けば聞くほど不思議な存在だ。

神と名がつく割に地球のように人々を作った存在というわけでもないければ、人々に審判を下すわけでも、何かを命令するわけでもない。強いていうなら抽象概念的な存在が人々に畏怖され勝手に『神』呼ばわりされていると言ったほうがしくりくる。

そうだとしたら、体を換えての代かわり。明らかに人間とは異なる力。

「さっき”いた”って言ったな。今は”いない”のか？」

「17年前に遡る。突然白神の存在が消えたの」

「消えた!？」

「そう、何百年も前からいた存在が突然消えた。私達の体に刻まれたものが消えたことを告げた。そして……」

「黒神の暴走が始まった」

酷く寂しい言い方に恭一は何もしていないのに申し訳ない気持ちになった。

ナナリアの顔を窺うと、見える前に明るい顔をあげる。

「でも16年前、その黒神も突如消えたの。ランデル博士の行方不明という情報と共にね」

「16年前に何が？」

「当時ヒトは異世界の研究をしていたの。ランデル博士とディステイル博士が中心だったんだけど、ある時を境に二人の間に亀裂が入ったらしいわ。でもディステイル博士のほうが優勢でランデル博士は追いつめられたの。私の推測だけど、その時異世界、つまり恭一がいた世界に飛んだんじゃないかな。だから今まで行方不明だった。多分そのフクカイチョウって人は博士の助手か、実験体だったんじゃないかな。人工生命体の研究もしてるってどこかで聞いたし。姿が違うのは私には分からないけど」

「途方もない話だな」

あまりにも自分が暮らしていた地球とは違いすぎて戸惑う。

学校で聞いた声は見つけたと言っていた。

おそらく会長と副会長のことだろう。

そしてその場にいたというだけで俺達3人は巻き込まれた。

血塗れになった二人を思い出す、何で俺だけが助かったのかは分からない。

会長が味方なのかは分からないが、どうにかして連絡がついたら協力してくれるだろうか。

「それで、この話を聞いた恭一はどうするの？」

「ベルデルガに行く。友達がいるはずだ、助けたい。それにそこに行けば帰れるかもしれないんだろ？」

「そっか、じゃあ私達も付いて行くよ。行くよね、皆？」

笑顔で今までずっと話し合いをしていたリューランら3人はえっ？

という顔をしてこちらを見た。

だが気にする様子の無いナナリアは強引に有無を言わさぬ顔と声で行くよね？と聞くと、訳が分からないという様子の3人はとりあえず勢いで頷いた。

恭一は嫌な予感がした

第七話

「よおおし、張り切っていいお!!」

1人ガッツポーズで気合い十分のナナリア、恭一含めた4人は同時にため息をついた。

その様子に後ろを振り返ったナナリアは憮然として表情で詰め寄ってくる。

「ねえねえねえ、折角の旅なんだからさあ、もっと明るく行こうよ!!」

「誰が明るくなんて出来るか!! よりにも寄ってなんでこいつがいるんだよ、足手まといだ!!」

ピンポイントで指を差された恭一は眉間にしわよ寄せた。

人を指さすとは失礼過ぎる、というか真正面から足手まといはないだろう。

「俺は当事者なんだ、嫌なら残ればいいだろ、俺は頼んでない」

「んだこらっ!!」

背中の大剣を引き抜きぴったりと刃先を恭一に合わせると威嚇してくる。

正直なところ逃げ出したいが、そんなことをしたら男が廢る。というか足がすくんで動けないというのが正確な表現だが。

「止めなってリユールン、ここでコイツ殺しても何の得にもならないよ。どうせならランデル博士に身代金を要求したほうが」

「「あんたのほうが性質が悪いわ!!」」

珍しくリユーランと意見が合う恭一だった。

ナナリアはクスクス笑い、クレイグは呆れてため息をついていた。リユーランは憤慨すると、大剣を背中の鞘に収めスタスタと歩き始めた。

だが途中で立ち止まって振り返ると、誰も付いてこない。怒鳴り声をあげた。

「おいっ！！早く来ないと置いてくぞ」

イライラを隠しもせずに叫ぶリユーランを見て3人が笑った。

「あれで結構さみしがり屋なんだぜ」

片手をあげて面白そうに笑うトリナがはいはいと歩きだすと、残った二人も歩きだした。

恭一は寂しがるリユーランを想像して吐き気を覚えると、口元を押さえながらも後ろからノコノコついて歩きだした。

「なあ、さっき魔術とか何とか言ってなかったか？」

さっき会話して一番慣れたナナリアに話しかけてみる。

「言ったよ。興味あるの？」

「すっげえある」

折角異世界に来たのだ。

しかもこっちから見た亜人的な存在や化け物までいて、おまけに剣も魔法もあるというどこの中2病設定？って聞きたくなるような世界。

実は昔剣道やってて、実家もある流派の……とまでは流石に上手くはなかったが、自分で冷静に考えても今から剣を握ったところであのリューランよりも実は凄いですとか有り得ないだろう。キャラ潰しもいいところだ。

例え出来たとしてもあんなに巨大な剣を片手で振り回せるような筋力はずけたくない。

リューランの羨ましいところは見た目そこまでムキムキマッチョじゃないことだ、どうやら鱗族は見た目以上に力が強いらしい。

まあ仮に俺がマッチョじゃなくても剣が振り回せたとして、前線であんな風に常時戦い続けるのなんて無理だ。ていうかそれ以前の問題だ。

だが仮にも同行させて頂く身だから出来れば足で纏いにはなりたくない、決してリューランに言われたからとかそういう理由じゃない。そこで思い出したのがさつきナナリアとの会話でチラッと出てきた魔術の存在だ。

細かく聞いたわけじゃない、素質が無いとダメって言われたらアウトだが、聞いてみる価値はあると思った。

「俺にも使えないか？」

「ううんとねえ」

「魔術は本来等しく皆が使える」

割と寡黙なクレイグが口を開いた。

視線が集中する。

「魔術とは己の中の精神力を魔力変換の糧として、固定観念にとらわれない概念、要するに有り得ない現実を容認することが出来る者が習得できる。本来というのは、大人になるにつれ柔軟性がなくなるから習得できなくなるということだ。己の世界とは全く違う”異世界”に來ても平気なお前なら使えると思う」

ようするに、俺はまだ中2病から抜け出せてないってことか？
……さすがに僻み過ぎか。

「さらにひと言魔術と言っても属性がある」

「ああ、やっぱりあるんだ」

よくある話だ。

「主に攻撃に優れる『火』、癒しに優れる『水』、速さに優れる『風』、防御に優れる『土』。これらは基本属性と呼ばれ扱いやすい」
「割とオーソドックスだな、属性同士で得意不得意であるのか？」
「いやっ、無いな。全て使い手次第だ。他にも『光』『闇』『無』といったものが確認されている」

「まずは基本から学んでいくのか基本だけど、生き物には所属属性があるの。リユーランは『火』、トリナは『風』、クレイグが『土』であたしが『水』。魔術を学ぶには自分の属性を知るところから始めるの」

「どうやって調べるんだ？」

聞くとナナリアが両手を出してと言ったので、大人しく出すと手首を掴まれ不思議に思っていると、背中 hands 当てられた。

直後に背中から全身に激痛が走った。

痛みのあまり声も出ず、腰から砕けてしまった。

「そんなに痛かった？」

「いってえよ。痛いんなら先に言ってくれ!!」

「先に言ったらやらないって言うでしょ？」

「……………」

否定はしない。

「それでどうだった？」

ナナリアがクレイグに顔を向けると、複雑そうな顔をしている。その様子に先を歩いていたトリナとリューランが戻ってきた。

「異世界人だからか？」

「何が？」

「闇以外の全ての属性を持っている」

「どういうことだ」

「理論上は闇魔術以外は全て使えるということだ」

「うそっ、有り得ない。異世界人だから？」

どうやら多少は俺にもチート要素があったようだ。

何か少し安心した。

「でも使えなきゃ意味無いんだろ。それで、どうやって使うんだ？」

「属性を調べると同時に魔力変換への門をこじ開けた。周りの気の流れを感じてみる、それから：そうだな手のひらに炎を描いてみる」

恭一は目を瞑ぶった。

気とは一体なんなのか？

肌に感じる風の臭い、木々の間から漏れる日の光、足元深くで流れる水の音。

世界の静かな動き。

それを感じると、自分の中に何かが流れるのを感じた。

手のひらを広げ、炎を思い描いてみる。

自分の手の上で真っ赤に燃え盛る炎、触れてきたものを燃やしすす赤い炎。

それを感じた時……

「おいっ、目を開けろ。死ぬぞ!!」

怒鳴られて肩を掴まれて驚いて目を明けると、翳した手のひらに巨大な炎が生まれていた。

「うわあああああ!!」

自分で驚いて尻もちをつく。

「落ち着くんだ、恭一。小さくて弱い炎をイメージするんだ!!」

どこからか怒鳴られて慌てて言われたままの炎をイメージすると、あっという間に炎は蠟燭程度のもになった。

それから消えていくイメージをすると、炎もしたがって消えていく。それを確認すると、ふうっと長いため息をついた。

「馬鹿かお前は」

背後から拳で頭を殴られた。

前のめりに倒れるとリューランの怒声がお玉に振りかかる。

「最初から巨大な炎をイメージする馬鹿がどこにいるんだ!!」

ここにいますとは口が裂けても言えない。

「落ち着いてリューラン。最初に言わなかったんだからしょうがないわ。それに訓練すれば戦闘にもそこそこ使えることが分かったんだからいいじゃない」

トリナが助け舟を出してくれると、リューランは舌打ちをした。

「恭一。要領は今のでいいから今度からもっと色々と細かいところまでイメージするといい、慣れれば無意識でも出来るようになるよ」
「そうそう、続けていけば完璧に出来るようになるよ」

なんか色々フォローしてくれているみたいだ、皆優しいなあと思いながらお前も見習えとリューランを見ると木に寄りかかりあらぬ方向を見ていた。

……もの凄い嫌われようだ。

男に好かれるのも微妙だが、嫌われるよりは良いと思う……。あくまで友達としてという条件付きだが、バカ話はこのくらいにしよう。

それからの道中恭一はずっと力のコントロールのみに専念していた。

第八話

しばらく野宿が続き、天井の下で眠ることが出来たのは出発してから一週間がたったころだった。

爪族の村・ルルガにつくと早速今晚の宿探しを始め、決まると村を見てくるとトリナとナナリアはどこかに行ってしまう、リューランとクレイグもギルドのほうを見てくるとどこかに行ってしまった。

疲れてフラフラする足で久しぶりの温かい布団に恭一は倒れこむと、ふかふかの枕に頭を埋めた。

洗いたてのいい臭いがする。

思い返せば異世界に飛ばされてから初めての布団だった。

「……………色々あったなあ」

この一週間で恭一は魔術の特訓に失敗するたびに怒り狂うリューランに疲れ切っていた。

そのおかげと言ったらあれだが、恭一はこの一週間だけで魔術に関して目覚ましい成長を遂げていた。

もう基本属性の基本魔術なら完璧にこなせる。

何度か襲ってきた陰や野生動物に関しても、皆の邪魔にならない程度に自衛も出来るし、数が多くなければ倒すことも出来た。

だが……

「やっぱりキツイわ……」

陰はまだ良いとしても野生動物を殺すとなると、終わった後に毎回泣いて吐いていた。

怖かった。

自分の手で生き物の命を奪うことが……。

終わるたびに嗚咽する恭一を責めるように怒るリューラン、そしてため息をつくトリナとナナリア、優しく宥めてくれるナナリア。辛かった、いっそのことリューランのように激しくせめてくれればいい。

戦わなくていいから自衛だけしてろとも言われた。

だが、それでも4人が生き物を殺すことに、そして襲われた瞬間に反射的に殺してしまう自分に恐怖してしまう。

生きるために他者の命を奪うことが当たり前の世界。

恭一は改めてその現実に向き合って押しつぶされそうだった。

「……………寝よう」

考えれば考えるほど重く押し掛かってくる自責の念。
今は何も見たくなかった。

「だれ？」

部屋というより檻というべき暗くて狭いその場所に訪問者が現れた。普段誰も人が寄り付かず、必要になったら決まった人間が訪ねてくる。

そんな場所に今まで見たことの無い少女が立っていた。
見降ろしてくるその目は酷く冷たいものだが、まだ幼い自分にはそれが分からない。

「どうしたの？」

純粹な好奇心のみで問いかけると、少女が座り目線を合わせてきた。漆黒の髪と瞳がきれいだと思った。

そしてそれに反して体の中まで透けて見えるのではないかというほど白くてきれいな肌。

思わず触りたくて檻の中から手を伸ばしていた。

顔に触れても少女は抵抗しない。

すべすべの肌が気持ちいい。

「どこからきたの？」

少女は答えない。

ただじっとこちらを見たまま視線を外さない。

それが妙に気恥かしくて顔を赤くすると、少女も手を伸ばしてきた。ちよつとビックリしたが、顔に触れた指が存外に優しいことを感じると嬉しくなる。

「ぼくシロンっていうんだよ。おねえちゃんはなんていうの？」

中々口を開いてくれないことに少し寂しさを覚えたが、じっと顔を見続けると

「……レイ」

薄く口が動き、聞こえるか聞こえないか位の声音で答えてくれた。何故だろう、それが酷く嬉しかった。

そしてもつとこの人のことを知りたいと思った。

目を明けると、見知らぬ少女が恭一の顔を覗きこんでいた。寝ぼけた頭でしばらくじっと見ていると、鼻をつままれる。呼吸が出来なくなったところで

「何しやる、このチビ!!」

勢いよく起き上がると、その勢いで少女がベットから転がり落ちた。そして面白そうに床で転がりながら笑い声をあげる。

「もう一回やって」

「はあ？」

何のことか分からないという顔をすると少女がよしよとベットの上に登ってきた。

どうやらもう一回転がしてほしい。

恭一は無邪気にやってとせがむ少女の頭を人差し指で軽く押し転がしてやる。

また少女が転がって笑い声をあげるが、またせがまれても面倒だとベットから起きあがった。

日の高さからまだそんなに寝ていないことが分かる。

まだリョーランたちは帰ってきていないようだ。

そして急に空腹を覚え腹が鳴った。

「お兄ちゃんお腹空いてるの？」

下から覗いてくる少女のに返答しようと思ったとき、自分が顔を隠していないことを思い出した。

ヒトと同じ姿の恭一は村に入るとき、警戒されないように顔を半分布で隠していたのだ。

慌ててその布の探し鼻から下を隠すと

「俺の顔を見たこと誰にも言うなよ」

「何で？」

「皆には内緒なんだ。君と俺との内緒の約束……な？」

内緒の部分を強調すると、それが嬉しいのかばあつと顔を明るくさせた少女はナイショ・ナイショと部屋を駆け出した。

少女をほって備え付けの本棚に視線を超越すと、当然だが読めない。今度誰かに教えてもらおう、クレイグあたりが良いだろうか。

やることも特にないのでこれからどうしようかと思っていると、部屋をかけていた少女がピタッと止まりあつと声を上げた。

どうしたと振り返ると、手を取ってグイグイ部屋の外に連れ出される。

その手は爪族としてはまだあれだが、普通よりも爪が鋭い。

階下の玄関まで来ると、受付にいた小太りの爪族のおばさんに見つかった。

「こらっ、勝手にお客さんを連れ出しちゃダメでしょー！」

受付から出てきたおばさんが言うのと少女は泣きそうになった、そして強く強く手を握ってくる。

「俺が村を案内してくれて頼んだんですよ」

「そうなのかい？でもこんな小さな子じゃしょうがないでしょ、他の者をつけるよ」

「大丈夫です。子供目線ってのも楽しいと思いますから」

行こうかと言うと少女が嬉しそうに頷いた。

なんて言うか、鼻から下を隠した怪しい男にこんな小さな子が連れて行かれるのに何も警戒しないのかと疑問に思う。

だがそんな疑問はすぐにとけた。

街に出るといたるところリューラン達の名前を聞いたのだ、かなり慕われているようだ。

「リューランたちって有名なのか？」

「お兄ちゃん知らないの？クレイグお兄ちゃんたちはね、前にあったセンソウでたくさんさんのヒトを殺したエイユウなんだよ」

悪寒が走った。

見た目5、6才の女の子が、たくさんヒトを殺したものを英雄と誇らしげに言っている事実には。

この世界は恭一がいた世界とは違うのだ、そう暗に言われた気がした。

そうか……、と一言だけいう。

「それでどこに行くんだい？」

「あたしたちの秘密の場所だよ」

「秘密の場所？」

「大人が知らない秘密の場所、お兄ちゃんにも教えてあげる」

そう言って少女が周りの目を盗んで物陰に入り、そこから村の外に出ると、森のさらに奥深くまで入っていった。

どう見ても獣道を進んでいくと、子供の楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

茂みを進み藪をかき分けると少し開けた場所に出た、そこで5人の少年少女が楽しそうに笑っている。

「誰だよそいつ」

一番最初に恭一のことを見つけた少年がいぶかしむように聞いてきた。

「宿に泊ってるの、クレイグお兄ちゃん達と来たんだよ」

それで納得したのか少年はふーんというだけでそれから特に何かは聞かれなかった。

少女達はそれからしばらく何かを話したあと、恭一のほうを向いて手招きをした。

興味深げに密林に出来た空間を眺めていた恭一はそれに気付かず手を引っ張られた。

引っ張られるままに障害の多い獣道をどんどん進み一本の巨木の前に出た。

樹齢何千年はいつているであろう巨木だ。

その前に立つと思わずすげえと言葉が漏れた。

すると突然背中を押された、不意打ちで力の抜けていた恭一は前のめりに倒れ、巨木の根の間にあった穴に頭から落ちてしまう。

10メートルくらい落ちたところで顔をあげると、次々と子供たちが恭一の上に落ちてきた。

突き飛ばされたり落下してきたり酷い仕打ちだ。

相手が子供と分かっていても抗議してやろうと顔をあげると、目の前にあるものに目を見張った。

「これは……」

「凄いでしょ。あたしたちの秘密だよ」

目の前にあったのは石作りの少女の像だった。

片手を天に向かってあげて微笑むその像は今にも動き出しそうだ。

見惚れていた。

石像であるにも関わらず、その少女の美しさに見惚れてしまった。
周りの少年たちも同じように食い入るように見つめている。
訪れた静寂。

だが。

突然響いた轟音に、その静寂は呆気なく壊されてしまった。

第九話

「きゃあああ!!」

何人かが悲鳴を上げ泣きだした。

恭一はその子たちを抱き寄せると、縋りつくように腕を回してきた。ここで待っているようにと子供たちにつげ、自身は穴の外に這い出ると、村の方角から黒煙が上っているのが見えた。

再び轟く音と共にその数は徐々に増していく。

村が何かに襲われている。

そんなことは馬鹿でも分かる状況だった。

恭一は獣道を突き進み村へ急ぐ。

どう考えても今の自分が戦力になるとは思えない、それでも体が動いた。

心の奥底で何かが叫んでいる、進めと……。

深い藪の中なかなか前に進めない、それでも懸命に進んだ。

村が近づくにつれ酷い臭いが漂ってきた、いろんな臭いが混じっている。

あと少しで村が見えるというところで、何か柔らかいものに足を引っ掛け転びかけた。

何とかバランスを保ち振り返ると、血だらけの男が倒れていた。

どう見ても死んでいる。

体のあちこちの服が裂け、肉が抉れ、臓物が飛び出している。

吐いた。

でも胃の中には何も入っていない。

学校で吐いたように吐くものが無くても吐いた、そのうち胃液に血が混じる。

「なんだってんだよ……」

学校での経験と最初の村での経験とで男が陰に襲われて死んだわけではないことは分かった。

陰は爪を使って襲ってくるが、この男はどうみても銃弾のようなもので襲われている。

勝てる気がしない。

相手がなんであるかと分かる前から判断がつく、そんなものを持っている相手と普通の高校生である恭一が戦ってどう勝てというのだ。体が勝手に動いた。

頭では無理だと分かっているのに体がいうことをきかない、自然と足は村に向かってしまう。

それに従って湧きあがる高揚感。

『ああまたこの感覚だ』

死地を目の前にした時感じる。

日常では感じることはない、有り得ないから……。

森を抜け広い原っぱに出た、村は眼と鼻の先だ。
だが

「なんだ…これは……」

村は焼け、人々の悲鳴と瓦礫の破壊音、そして異様に充満する鉄の臭い。

のそりのそりと足を踏み出した。

リューランたちは大丈夫だろうか？

彼らならきつと大丈夫だろう。

ぼおっと歩いていると、突然目の前を土煙りがあがった。
腕で目を庇う。

「こんなところにまだ残ってたか」

女の声だ。

現れたのはサイドに銃口を持つ2足の機械だった、どう見ても兵器。銃口がピツタリと恭一に合わせられる。

「んじゃ、大人しく死ね」

銃口が火を噴いた。

だが大人しく殺されてやる気はさらさらない。

風の力で弾丸を避けると、手のひらに火球を生み出し飛ばした。

兵器に直撃するが威力が弱かったらしい、全くダメージを受けた気配がしない。

「めっずらし、こんな辺境に多属性持ちのメイジがいるとはね」

向けられた銃口が再び火を噴いた。

続けざまに降ってくる弾丸の嵐になかなか反撃の隙が出来ない。

『なんとかして銃撃を止めないと反撃が出来ない』

先程からの正体不明の高揚感に恐怖は完全に消されている。

それはそれで今はいいとする。

だが問題なのはいつまでこの弾丸の嵐を避け続けられるかだ。

風の力でスピードを上げているとはいえ、それなりの集中力がある。

そして集中力があるということは、即ち疲労するということだ。

つまり疲れて集中力が切れた瞬間己の死が決まる。

なんとかして本体と銃身を切り離したい。

だが肝心の切るための道具が無い。

真っ先に日本刀が思いついたが無茶にもほどがある。

今自分が持っているのは魔術だけだ、その中で切れるものがあるとするば

『……水だな』

ウォーターカッター。

水圧で作りに出されるそれは性能が上がればダイヤモンドまで切断が可能なものだが

『勝負は一回だな』

いかんせんともないスピードで水を噴射させるにはそれなりの集中力と気力が必要になる。

与えられたチャンスは一回だけだろう。

恭一は両手のひらに水をためた。

それをどんどん高濃度に圧縮していく。

自分のなかで限界がきた。

それを維持しつつさらに風の力も早め一瞬銃弾の嵐を抜けた瞬間、水を勢いよく発射するとともに腕を振り上げた。

きれいに円を描いて明後日の方向に飛んでいく銃身。

少しずれたが目的は達成できた。

相手が驚いている隙に残ったもう片方も切断してしまう。

「ちょっと、いきなりなんなの!？」

思わぬ反撃とその方法に面食らったのか、女が素っ頓狂な声を上げた。

「そう簡単に殺されてたまるかよ」

「下等生物の分際で誰に向かって口きいてんの!？」

いつの間にか2本の足の付け根から手と思われるものが生えていた。どう見ても義手だが動きがやけに生々しい。それが突然火を噴いた。慌てて避けると落下地点の下草が燃えている。本物の火を噴いたらしい。

「魔術が使えるのが自分だけだと思ったら、大間違いなんだよ!!」興奮したのか次々と火が飛んでくるが、なかなかあたらない。再び多量の水を生み出すと津波をイメージした。相手にそれを叩きつけてやる。

「きゃああああ!!」

足元を取られバランスを失った2足兵器が転倒する。

「あっちゃつと、どうしてくれるのよ!!」

どうやら倒れると自力で起きあがるのが難しいらしい。間抜けな話だ。

何とか起きあがろうとする兵器の傍に寄って足も切断してやる。これで立つことも移動することも不可能になった。

「俺の勝ちだな」

勝者の余裕、軽い優越感に浸って言ってやった。

「ふざけんな、劣等種のくせに偉そうにすんじゃない」

即座に返ってくる悪態。

その言葉に恭一は胸の中に何かを感じる、それが何かは分からない。でも怒っているのは分かる。

少なくとも人種の違いによる差別というのは、恭一のいた日常には無かった。

だからこそ感じる理解出来ない憤り。

「……さっきから下等だの劣等だの、そんなにお前らは偉いのかよ」

「当たり前だ！！過去に囚われいつまでも発展できないお前ら蛮族と、高貴な存在から作られ日々発展する我々とは、比べることも憚られる！！」

呆れて何も言えなかった。

そんなことを理由に抵抗する術を持たないものを一方的に虐殺するほうがよっぽど野蛮だ。

日々進化して発展しているというのなら、暴力という力を使わずに他人を支配するほうがよっぽど賢いやり方だと思う。そんなことが相手に理解されるとは思えないが。

「でも負けは負けだ」

諦めろと言外に言った。
すると

「甘いんだよ」

2本の手が動き同時に火球が生み出された、慌てて手の動いた方向を見る。

「あっ!!」

少女がいた。

森の中の穴で待っていると言ったはずなのに何故出てきたのか。

今すぐに怒鳴りたい。

だが火球が放たれた。

それに少女が気付いた。

だが恐怖したのかそこから動かない。

恭一はとっさに水を生み出した。

だが間に合わない。

まっすぐに少女に向かっていく火球、そして……。

「あああああああああああああああ!!!!!!」

つんざく様な悲鳴が辺りに響き渡った。

恭一は女少女に駆け寄ると抱き落とした。

ぐったりとして動かない、呼吸もしてない。

パニックになった。

火球は直撃しなかったらしいが、地面に当たった爆風で少女は吹っ

飛びそのまま地面に叩きつけられた。

どう見ても頭から落ちていた。

その事実が恭一に現実を叩きつける。

死んだ死んだ死んだ死んだ死んだ死んだ死んだ死んだ死んだ……。

言葉が頭の中を巡回した。

さっきまで恭一に笑顔を向けていた少女。

楽しそうにベットから転がしてくれとせがむ少女。

さっきまで動いていた存在が、今はもうただのモノと化していた。
学校ではまだそれでも正気でいられるだけの理由があった。

だが今は何もない。

見知らぬ土地でたった一人。

憎い、狂おしいくらい憎い、殺してやる。

恭一は火を消し、その場に少女を横たえたと、フラフラと立ち上がった。

「あっはっはっは。悲しい、悲しいの？ そんなにその子が死んで悲しい？ 可哀想、可哀想、あんたがいけないんだ、あんたが甘いから死んだんだ」

「……うるさい」

「でも安心しなよ、すぐその子の元にあんたもいけるよ。さっき救援を呼んだ、すぐに仲間が駆けつける。そうしたらあんたズタズタだよ。全身穴だらけになるんだ、そしたらあんたがいてもいなくても我々は向こう側が見えるようになる。愉快だよ、凄くゆかつ」

「黙れ」

気付いたら兵器の上に立ち見下ろし、酷く低く冷淡な声を発していた。

相手が声を息を飲むのが聞こえた。

「おい急にどうしたんだよ、落ちつけよ、仲間が来るんだぜ？ 無駄な足掻きは」

言い終わる前に手のひらに生み出した火球を拳ごと叩きつけた。

手が痛む、骨にヒビが入ったかもしれない。

関係無い。

相手が叫ぼうが何をしようが関係無い。

火も水も風も土も皆圧縮して叩きつけてやった。

燃えて冷やされ切断されて変形する。

そのうち切断された部分から赤い液体が流れてきた、悲鳴ももう上がらない。

それでも攻撃を止めなかった。

ついにはグチャグチャに元が何だったのか分からないほどとなった。ようやく恭一は攻撃を止めたが怒りが治まらない。

気付いたら囲まれていた。

これが呼んだ仲間だろうと頭が考えた。

全ての銃口がこちらを向いている。

だがそんなものは目に入らなかった。

「とんでもなく頭のイカレタ奴がいたな」

誰かがそんなことを言った。

だが言い終わる頃にそいつらの視界に恭一はいなかった。

「敵ながら酷い有り様だな……」

リューランが血と肉の海の中に佇んで呟いた。

戦闘中突然どこかに向かった2足兵器を追ってきた結果がこれだ。

全てバラバラに破壊され、中に乗っていたであろう者も残らず原型を留めていない。

そしてこれをやったであろう人物は今……

「リューラン、この子まだ息がある!!」

「ホントか!!」

駆け寄るとまだ小さな女の子だった。

ナナリアが治癒術を駆けるとしばらくして目を開けた。

「大丈夫か？」

「……皆は……どこ……。おと……さんと……おかあさ……」

「大丈夫だよ、大丈夫だからね」

実際この子の父親と母親が誰なのかは分からないし、どのくらいが生き残ったのかも分からない。

でもそれを今この子に言うのは酷だ。

「森にね……まだみんなが……いるの……あたし……見てくるって……おにいちゃんが……しんぱいで……おにいちゃんはどう……こ？」

それを聞いたトリナとクレイグが顔を見合わせると森の中に駆けて行った。

再び目を閉じた女の子をナナリアに任せるとリューランは立ちあがった。

「ナナリアは村人の治療にあたってくれ」

「リューランはどうするの？」

「……あの馬鹿を探してくる」

好きなだけ暴れるだけ暴れて突然姿を消したあの馬鹿を……

第十話

少女の髪は今まで触ったことが無い質感をしていた。
すると指が通りとても触り心地がいい。

しばらく触っていると手を払われた。

寂しい。

「お前は何故ここにいる」

唐突に少女が口を開いた、目は相変わらず酷く冷たかったが、それ以上に少女から口を開いてくれたことが嬉しかった。

「あのねぼくは言われたとき以外はここにいくちゃいけないんだって」

「それは何故だ」

「ぼくの力は特別だから外に出ると危ないんだって」

「誰がそんなことを」

「分かんない」

ここにくる人間は誰もが顔に白い面をつけていた。

目の部分だけは穴が開いていたが、こちらから中を窺うことは出来ない。

「ここから出ようとは思わないのか」

「なんで？」

凄く不思議なことを言うと思った。

確かに凄く居心地がいいとはお世辞にも言えない、でも。

「だってご飯も出るし誰も襲われないよ。それに何も考えずに言われたことだけをやるのは楽なんだって、楽なことは幸せなんだって」

「…………人形」

「なあにそれ？」

少女は自分以上に物知りなのだろう。

それはそうだ、この檻の中から出ない自分と自由に動き回る少女。世界が違う。

「でもね、”皆”を動かなくするのだけは嫌なんだ」

「……………」

「凄く寂しい。でも言われたことはちゃんとやらなきゃ怒られちゃう、怒られるのは嫌。でも、動かなくなった”皆”を見るのも嫌。凄く痛いんだ」

そういつて押さえた位置は胸。

理由は分からない、分かるのは動かなくなった”皆”を見ると締め付けられるようにそこが痛い。

それが苦しくて苦しくて、辛くて悲しくて寂しくて…………。

自然と零れてきた涙。

少女がそれを手で多少乱暴だったが拭ってくれた。

その手が頭に移動しまた乱暴だが撫でてくれる。

心地よくてそれが嬉しかった。

頭が朦朧とする。

視界に入ってきた光のせいかもしれない。

手で隠そうとしたが体が動かないことに知り、そして自分が布団の上で寝ていることに気が付いた。

「起きたか」

女の声がした。

また女か……、起きた時に最初に目に入るのはいつも女性の顔だ。

最初は壮年の女性、次はお子様少女。

今度は年頃の女の子がいいなあと不埒なことを考える。

「声聞こえてるか？」

そう言われて声のする方向に顔を向けた。

良かった、年頃の女の子だ。

見た目は10代後半で年上っぽい、まだ少女のあどけなさを残している大人に入りかけの女性といったところだろうか。

「聞こえてるんだな、ならいい。飯を持ってきてやる、それまでに起きあがれよ」

足早に去る彼女の足音を聞きながら気力で体を起こした、体の節々が痛み悲鳴をあげている。

壁に体を預け一息つくと周りを見渡した。

また見慣れない場所だった。

「俺は……」

頭痛がした、記憶が曖昧だった。

覚えているのはぐったりと倒れている少女。

恭一は布団をかき抱いた。

「どうした？」

顔を上げるといつの間にかお盆に湯気の立つスープを持って少女が立っていた。

飲めとそれを渡されると、手から伝わってくる温かさが気持ちいい。

「私はラゼル、ヒト族だ」

「恭一、種族は…多分ヒト」

「何だその多分って言うのは、混血か？」

器用に片眉だけあげてラゼルいぶかしんでいる、この少女にどこまで本当のことを言えるだろうか。

「どこからきた？」

「…：分らない、近くで村が襲われてないか？」

「村あ？そんなものはこの付近には存在しない」

「ウソだろ！！」

「本当だ、嘘なんて言ったりするものか。ここははぐれ者が隠れ住む集落、他の人間が近寄ることなんて滅多にない」

「それじゃありューランたちは、あの女の子は！！」

呼吸が荒くなった。

どうしてもあの女の子があの後どうなったのか知りたかった。

「リューランってお前…：、まさか転移魔術にでも飛ばされたんじゃないか？」

ラゼルが恭一を探るように見てくる。

「転移魔術？　どういうことだ」

「リ्यूランってのは西方の剣豪だろ、トリナ、クレイグ、ナナリア4人で各地を転々としている英雄だ。ここは彼らの行動範囲からはちょうど惑星の反対側に位置している大陸の辺境の国だ」

「大陸すら違うのか……。俺は何日眠ってた？」

「およそ丸2日。発見したときは血塗れだったがお前に目立った外傷は無いし、あんなに血の臭いをさせておいて野犬にも襲われていないところを見ると、お前が現れてから発見したのはすぐだな」

頭が混乱してきた。

ここはさっきいた場所からは遠く離れていて、血塗れで倒れていたが俺に外傷は無い。

つまり全部返り血ってことだ。

「これらのことから考察するに、お前は転移魔術で飛ばされたか、それとも何らかの影響で時空に歪が出来てそこから飛ばされたかな」

「その転移魔術は誰にでも出来ることなのか？」

「無理だ」

即あっさりと否定された。

「転移魔術を単体で行おうとしたら術者が死ぬよ、魔力を増幅装置に何日かかけてため続けてたなら別だけど」

「話が噛み合わない」

「当たり前だ、私自身がよく分かって無い。悪いがお前の魔力量を測らせてもらった、お世辞にも多いとは言えない。使える種類は多いみたいだが、それでもお前に転移魔術が使えるとは考え憎い。それが余計に頭を混乱させる。お前ここに来る前何をしていた？」

リユールン達とベルデルガを目指し、そして途中立ち寄った爪族の村がどこかの兵器に襲われ、そして女の子が一人やられた。

そこから先の記憶が曖昧過ぎて、気付いたらここで寝ていたことを話すとラゼルは深く考え込んだ。

「多分襲ったのはデルカ帝国の有人歩行兵器だな」

「デルカ帝国？」

「ベルデルガを首都とするヒト族の国、圧倒的な軍事力で世界を支配している。お前がいたのはシュレンナー王国、多様な種族が住んでいる小国だが、デルカ帝国にと隣接している上に勝手な軍事演習とは名ばかりの虐殺が多くてヒト族に対する憎悪が他の類を見ない状況になっている」

「デルカは何故小国のシュレンナーを支配下にいけない」

「めんどろだからに決まってる、自費で人体実験場をこさえるよりもずっと楽だろ？」

絶句した。

デルカのやっていることにも、そしてそれを何でもないかのように話すラゼルにも……。

「お前は……」

「事実を述べただけだ。ここで怒ったところで、彼らの生活が良くなるわけじゃない。怒ったところでただの偽善にしかない」

ラゼルの言っていることは間違っていない。

でも納得出来なかった。

「……そうだ。お前なんでベルデルガを目指した？あそこは何日か前に巨大な爆発があったって聞いたが………」

「…………仲間が…仲間が捕まってる。ディステイルとかいう奴に」
「どういうことだ。あの女は種族意識が人一倍強い、同じヒトを捕らえるなんて有り得な…………お前、まさか」

異世界人か？というラゼルの言葉を無言で肯定した。

頭を抱えるラゼル。

しばらくお互いに一言も喋らず無言だった。

先に口を開いたのはラゼルだ。

「思ったより事は荒れてるな」

ため息をついたラゼルは空になった器を盆にのせると部屋から出て行った。

残された恭一は壁に寄りかかりこれからのことを思案する。

太一と美夜を助けようと思えば思うほどどんどん遠くなっていく、しかも二人の安否が全く分からない。

見知らぬ土地で、しかも予想以上に広くて、複雑な世界で生きていける自信がなかった。

「俺…ゆとりだしなあ…………関係無いか」

ゆとりを言い訳に墮落したのは己の責任だが、この現状ではそれも関係無い。

「ついこの間までただの高校生で馬鹿やってたのに、何やってんだ俺…………。学校どうなったんだろ、母さんたち俺のこと心配してんのかなあ…………てゆか手料理食いてえ…………」

完全にホームシック状態だ。

しかも異世界で。

恭一はしばらく、今は見ることが出来ない過去の思い出に浸っていた。

第十一話

「どうされますか？」

30代前半と思われる男が聞いた。

明らかに自分より年齢が低い少女に大してやけに腰が低い。

しかも男は腰に剣を携えており、年齢の割に体はガツシリとしている。

「こうなった以上黙っているわけにはいくまい」

「本当のことかも分かりませんよ」

「嘘を言っているようには見えなかったが」

「見た目で人を判断するのは宜しくないと前から」

「分かっているようさいなあ……」

「本当に分かっているらっしゃるんですか？」

「……」

男の質問に少女は答えなかった。

男は片手で頭を支えてため息をついた。

「まあどうせそろそろ頃合いだったんだ。お前は先に行って他のところにいる奴らを収集しといてくれ、私は恭一を連れて後から行く」

「お一人で大丈夫ですか？」

「私を誰だと思っている。あんな臍抜けた面したガキ一人に私が負けるとでも思ったか？」

ニヤツと口元を歪ませる少女ラゼルに男はまた始まったと呆れてしまった。

ラゼルが頑固なことは分かっている、何を言っても連れはいらない

というだろう。

「優秀な馬を2頭用意しておきます。それとこれを」

差し出されたのは一振りの剣だ。

見た目だけでも高価なものだと分かるそれをラゼルは受け取ると腰に下げた。

「助かるよ、聖都で待ってろ」

男はラゼルの前にひざまずくと深く頭を下げ、踵を返すと足早に去っていった。

ラゼルはそれを満足げに見送ると、再び恭一のいる小屋へ足を進める。

「よう、待ったか……って、お前何してんの？」

何故か座禅を組み難しい顔をしている恭一を見てラゼルが首を傾げた。

「俺の世界ではこれをやって精神力を高める修行があるんだ（＊）、魔術のイメトレに使えないかとやってみただけど、体が硬くて足が痛くなるだけだった」

「……お前…馬鹿だろ」

ラゼルの素直な感想だった。

うはっとか言って座禅をといった恭一はそのまま体に残った痛みに倒れこんだ。

こんなにつらいとは思わず、こんなことをしようと思った自分に腹が立つ。

「ところで、これから私はこの国の首都に行く。お前もついてこい、どうせ暇だろ？」

「言い方がむかつく」

片手をひらひらさせてさも当然といった感じのラゼルを殴ってやりたいと思ったが、生憎女子を殴る趣味は無い。
ただし美夜は別だ。

「首都って何のようがあるんだよ」

「ただの野暮用だ。だが道中危険がいっぱいでな、囧を……じゃなくて心強いだろ？」

「お前俺を餌に自分は逃げるつもりか！！」

「失礼な、お前が敵の注意を引きつけていれば安全に外から攻撃が出来るだろ」

「どっちみち俺の身が危険なのは変わらないじゃないか」

「まあそういうな、優秀な馬を用意したから追いつかれることはないだろうさ」

そういつて恭一に何かを投げて寄越した。

慌てて受け取ると短剣だった。

「なんだこれ」

「護身用だ、持ってろ」

言われてラゼルを改めてよく見ると、腰にそこら辺にあるとは思えない剣を下げていた。

「そんなものお前に使えるのか？」

「もちろんだ、バカにするな」

これに着替えろと投げられた服を見て、まだ自分が血が乾いてどす黒くなった高校の制服を着ていることを思い出した。

「風呂はあっちだ。一刻ほどで出る、それまでに準備を全部終えろ。私は馬の準備をしてくる」

足早に去るラゼルを見送り恭一は示されたほうに行くと、確かに風呂があった。

まあそれは風呂なんだろうが、どうみても五右衛門風呂だ。しかも中身は冷水。

「俺に風邪をひけって言うてんのか、あのアマ」

悪態をつきながらもこのまま汚い格好でいるのも嫌なのでおとなしく服を脱いだ。その後野太い悲鳴が辺りに響いたのは言うまでも無い。

なんの修行かと思えるカラスの行水を終え、貰った服に着替えて外に出るとすぐ側で熱い息がかかった。

何だと思って横を向くとかなり小型だがどうみてもティラノサウルスがいた。

しかも2頭もいる。

思わず悲鳴をあげた。

「もっともしかして、馬ってこれのことじゃないだらな」

その背には鞍がありどう見ても人が乗りますと物語っているが、怖かった。

さっきから恭一をねめつけるように牙を剥いているティラノサウルスたちは鼻息が荒く、口を開けてハアハア言っている。

臨戦態勢だ。

こういうとき目を離したら襲われると誰かが言っていた気がする。なのでこちらにもティラノサウルスをガン見した。

「何をしている」

突如背後からかかった救いの声。

それでも視線を外さず耳だけ寄越した。

「そんなに身構えなくても大丈夫だ、こいつらはこの世界でも比較のおとなしい生き物だから」

そういつてラゼルはティラノサウルスの首元をパシパシと叩いている。

身震いした、末恐ろしい。

ラゼルはその背に跨り、恭一に残った一匹に乗るように指示する。恐る恐る近づき背に手を駆けると、一気に跨った。

乗馬すらしたことないのにいきなりティラノサウルスに乗れとか難易度が高いにもほどがある。

「こいつらは速力はそのままででもないが脚力に優れ持久力もある、この世界では広く乗られているよ」

嘘をつけ！！と叫びたくなった。

少なくともリューランたちと一緒に旅していた時はこんな生き物は見なかった。

実際人間が乗る生き物はみたが、どれも地球では見たことがなくても穏やかな見た目で体毛が生えていた。

こんな凶暴な見た目で牙が生え全身を鱗で覆われてなんかいない。泣きたくなった。

「そんじや行くか」

ラゼルが走りだすと、こっちのティラノ君も倣って走り出した。恭一は振り落とされないようにするので精いっぱいだ。

「十分はえええええ！」

悲鳴に近い絶叫。

それでも揺れはそんなにないため慣れるのにそう時間はかからなかった。

小一時間走ったころにはすっかり乗りこなせるようになっていた。

「文句を言った割に上達が早いじゃないか」

日が暮れてからも走り、満点の星空になったころようやく二人は歩を止めた。

近くの木にティラノ君2頭を繋ぎ焚き木を囲むようにして座った。

今日の夜ご飯はさつき狩ったイノシシ的な生き物の丸焼き。

イノシシのくせに四肢がサルのように木々を自由に飛び回っていた、木にぶら下がってこちらの様子を窺うイノシシ。

笑いを堪えるのに必死だ。

味は良くも無ければ悪くもないが、少々硬くて顎が疲れる。

普通に引きちぎって食べているラゼルの姿がどうみても野生の少女にしか見えないのは気のせいではないだろう。

「道中危ないと言ってたくせに、全然そんなことないのな」

「偶々運が良かったただけだろ、これからの時間は陰の活動が活発になる。それに夜盗もいるしな」

「……安心して寝れないじゃん」

「だから交代で見張りをするんだよ。ということでお前先に寝ていぞ」

「いいのか？」

「疲れてるだろ。それに後のほうが襲われる確率高いしな」

はっはっと笑顔で告げたラゼル。

なんて言うか強かなんだと思う。

とはいうものの、やっぱり疲れているので先に休ませてもらうことにした。

疲れているときに襲われたら洒落にならない。

木の根元に寄りかかり、無いよりはマシの布をかけると、目を閉じた。

睡魔はすぐに襲ってきた。

よく晴れていた。

雲ひとつ見えない大空に心が躍る。

大地を照らす輝く太陽に向かって手を伸ばせば届きそうだ。

風が草木と共に踊り、鳥たちが歌っていた。

わくわくする。

久しぶりに檻から出て外に出たのだ。

変わることのなく自分を迎えてくれた世界に安堵する。

「おはよう」

誰かに向かって言ったわけではない。
世界に向けて言った言葉。

遙か昔に存在していた母に対しての言葉。

愛しいこの世の全ての存在に対しての言葉。

そう全てが愛しくて美しくて……。

だが突然胸が痛んだ、過去に何度も経験した痛み。

世界が傷つき泣いている。

『苦しい、死にたい』『憎い、殺してやる』『何で私だけが』

至る所で負の感情は湧いては消え湧いては消えを繰り返し、この世の全てを傷つける。

「止めて、これ以上聞きたくない!!」

耳を塞いで蹲った。

強すぎる感情に押しつぶされそうだった。

涙が零れる。

外は好きだ。

この世の全てがあるから。

外は嫌いだ。

自分を押しつぶそうとするから。

こんなに愛しいのに世界は世界を壊そうとすることを止めない。

心配した鳥が肩に止まり「どうしたの？」と聞いてくる。

風が頬を優しく撫で、草木が優しく包み込んでくれた。

皆聞こえない。

世界が苦しんでいるのに誰も聞こえない。

彼らにとって世界はひとつじゃないから、ひとつがたくさん集まっ

たのが彼らにとっての世界。

彼らは世界の一部でしかないから全体を知ることが出来ない。

でも僕は違う。

僕が世界であり、世界が僕の一部。

一部が苦しめば全部である僕も苦しい。

「泣かないで、苦しまないで!!」

僕は世界を抱き締めた。

いくら癒しても効果は一向に現れない。

そして悟った。

世界はもう僕の一部では無いことを。

檻に入っている間、いつの間にか世界は僕から離れてしまった。

もう僕じゃない別の何かになってしまった。

失ってしまったことが悲しくて僕は泣いた、それでもまだ失ったものが愛しかった。

「歩こう、そして知ろう。そして僕から離れて生きようとする世界を愛そう、変化を受け入れよう」

世界は絶えることなく変化する、より強くなろうと進化する。

そう昔母が作ったから。

僕も同じ。

今日と同じ僕は明日には存在しないように。

僕ももしかしたら世界の一部に自分でも気付かないうちになつていたのかもしれない。

心が晴れ渡るようだ。

「僕も皆と同じ世界の一部、愛しい皆と同じ存在。僕は僕だ」

嬉しくって飛び跳ねた。

世界が苦しんでいるのも変化の一部。

なら僕は少しでも苦しまないで変化出来るように手助けしよう。

檻の中になんていちゃいけない、あそこに僕の世界は無い。

優しさで包もう、愛情で包もう、癒しで包もう。

それが僕の存在理由。

僕はシロン。
全てを愛す、世界の
一部。

第十一話（後書き）

＊作中の座禅の説明ですが正確には精神を統一し悟りを求める修行です。高校生の恭一君の知識なので悪しからず

第十二話

不思議な感覚が心地よくていつの間にか寝込んでしまった。
何か夢を見た気がする。

ラゼルはまだ眠い目をこすると、目の前で気持ち良さそうに爆睡している恭一を叩き起こした。

「いつまで寝ている、交代だ」

頭を蹴り恭一を起こす。

「何だよ」

「交代だって言ってる、起きろ」

気持ち良く眠っていたのに起こされて不機嫌だったが、仕方なく伸びをすると立ちあがった。

まだ眠い、立ったまま眠ってしまいそうだ。

「ちょっとその辺歩いてくる」

眠気を飛ばすために付近をウロウロする。

暗い中木々の間から洩れる星の光だけが唯一の頼りだった。

「……火の魔術と光の魔術、こういうとき照らすならどっちなんだろう」

ちょっとした疑問が浮かんた、今度光の魔術についても勉強してみようと思う。

だが、確かに何があるか分からないのは不便だが、変に火を起こし

て何かを引きよせても困る、微妙なところだ。

時々木の根に足を引っ掛けながら進むと、川が目の前に現れた。流れはそんなに早くなく深いわけでもない、至って穏やかな川だった。

その表面が星の光を反射してとても美しい。

近づいてみると魚が何匹かその背に星の光を反射させながら優雅に泳いでいた。

「これ食えんのかな」

ガキの頃よく両親の実家近くの川で手づかみで魚を捕まえた、その要領で泳ぐ魚を捕まえる。

手の中で元氣よく暴れるそれはヌルヌルとしてよく滑った。

さてこれからどうしようと考え、袋も何も持ってきていないことを考え

「明日にするか」

少々未練が残るが暴れる魚を川に戻した。

ふと何かの視線を感じる。

だが辺りを見渡しても何も見当たらない、だが確かに感じる何かの気配。

恭一は身構えると慎重に気配を探った。

「誰かいるのか？」

当然返答は無い。

だがその間にもドンドン気配の量が増えていき、囲まれた。完全に包囲されると近くの茂みが動き大柄な男が出てきた、どうみても堅気の人間ではない。

「ボウズ、こんな夜中にウロウロしてると危ないぞ」
「そうみたいだな」

会話している間にもドンドン茂みから沸いて出てくる。

星の光に照らされて浮かび上がるそのから、様々な種族がいることが分かる。

目の前に浮かびあがった男の顔を睨む。

すると恭一の顔をみた男が下品な笑みを浮かべた。

「男のくせに偉く整ってんじゃねえか、女じゃないのが残念だ。俺は男を食べる趣味は無いからな、ガハハハハハ」

そういつて男が豪快に笑うとつられて周りの男も笑い始めた。

正直ウザイ。

恭一はため息をつく、川に目をやった。

そして精神を集中すると川の水がうねりをあげて持ちあがった。

突然川の水が渦を巻き始めたのをみた男たちが笑うのをやめて顔面を蒼白させた。

「てめえ、魔術師だったか！！」

「誰も違うとは言っていないだろ、最初から」

意地の悪い笑みを浮かべ逃げ惑う男たちに大波が襲いかかった。

一人残らず絡め捕ると強制的に川に引きずり込む、普段は穏やかなはずの川は今は濁流と化していた。

「下流で反省してこい」

そのまま抵抗する術も与えず下流へと流した。

それを見届けた恭一は魔力の使い過ぎか立ち眩んだ、心なしか胸部も痛い。

川はすでに元の穏やかな川に戻っている。

「……戻ろう」

帰りは夜盗もないだろうと火を灯した。

無事に戻るとラゼルはさっきの争いなど無かったかのように可愛らしい寝息を立てて気持ち良さそうに眠っていた。

その寝顔はとても愛らしく下手をすると変な気でも起こしそうだ、地球では恭一だって健全な高校生である。

しばらく眼福とでも眺めブルルと鼻息がしてそちらに視線を向けると、恭一が乗ってきたティラノ君がこちらを見ていた。

「ああ悪い、起こしたか」

じつと物言いたげにこちらを見ている。

「別に寝込みを襲ったりしないよ」

ティラノ君に手を伸ばすと長い舌が舐めた、何とも言えない感触だ、気持ちのいいものではない。

そのまま首の付け根をさすってやると気持ち良さそうに目を細めた、それを見ているとつられてこっちまで眠くなってくる。

もう見張りなんてしなくていいかななんて考えていると、ティラノ君が自分の腹の脇を視線で指した。

こっちで寝てもいいということらしい。

一瞬悩んだが折角の好意だし、これを機に仲良くということとでそこに寝転ぶ。

割とティラノ君の体温は温かく丁度良かった。

翌朝ラゼルの罵声で目が覚めた。

ティラノ君と一緒に寝ぼけた目でラゼルを見ると今にも爆発しそうだ。

「朝っぱらからうるせえよ」

「うるさい！！あんたなんで見張りをサボったのよ、何事も無かったから良かったものもし万が一が起きたらどう責任とるつもりだったの！？」

「その万が一が起きてまとめて片付けて身の安全を確保したからこうして惰眠を貪ってたんだよ」

「何ですって、襲われたの？なんで起こさなかったのよ！！」

「川に行ったときに襲われたんだよ」

「アンタ一人で片付けたの？」

「他に誰の助けがあるんだよ、頼むから朝から大声だすなよ」

すっかり頭が覚醒してしまった恭一は大きく伸びをすると、ティラノ君も横で伸びた。

首をコキコキならしティラノ君に下がっていた荷物袋を適当にあさると食料を手取る。

朝ごはんは一日の中で一番大切なものというのは持論だ。

「食べないのか？」

一連の勝手な行動を黙って見ていたラゼルに食料を突き出すと、何故か顔を真っ赤にして食べるに決まってるでしょと言、引っ手繰るようにして奪うとバクバクと凄い勢いで食べ始めた。

あんな勢いで食べて喉に詰まらせないのかと心配になってくる。

その後水浴びをしてくるというラゼルから覗くなどキツク言われ、ティラノ君とのんびり待っていると30分ほどで戻ってきた。

各々のティラノ君の荷物を確認し出発する。

「この先に村があるけど寄ってる時間は無いから突き抜けるよ、そしてたら多分日没から半時くらいで聖都に着く」

「休憩は？」

「無いに決まってるでしょ」

「マジかよ」

当たり前という表情に愕然する。

実は少々お尻が痛いのだ。

この調子だともしかしたら聖都に着く頃には脱腸してるかもなあと思ひ、背筋に悪寒が走った。

それを察したのかティラノ君が鼻をならしてこちらを窺ってくる。

大丈夫だと首を撫でてやった。

この世界に来て初めての信頼関係というようなものを築いているような気がしないでもない。

人間じゃないのが少しさびしいが、文句を言ったらティラノ君が可哀想だ。

その後ラゼルは事前の言葉通り村を迂回して通り過ぎ、聖都まで休まず走り続け、何とか日没前につくことが出来た。

「それじゃ宿でも探そうか」

「やっと思める」

脱腸はしなかったがお尻が限界だった。

もう二度とこんな無謀なことはしたくない。

ティラノ君も預かってくれるという宿はすぐに見つけた、しかも聖都のなかでもかなり良い場所だ。

外観からでも一泊かなりの金額がすることが窺える、宿代はどうするのか聞くと心配しなくていいと含みのある笑みを浮かべて言われた。

それを見て聞いちゃいけないことを聞いたと瞬時に悟る。

部屋はもちろん二部屋借り、明日は朝食は食べてもいいがなるべく部屋にいろとだけ言われた分かれた。

野宿はたったの一日だけだったか、ハードな旅のせいで布団で寝るのが一年ぶりのような錯覚がある。

ベットに飛び込むとこの世界に来て一番のふかふかな布団だ。

環境の全てがトップクラスなので当然なのだが。

「それで、一体ここに何のようがあったんだよ……」

うつ伏せに寝転がりながら何のためにここに来たのか考えた、はつきり言って来た意味が恭一にあるのか疑わしい。

出るとき旅は危険だからとか色々言っていたが、結局昨晚夜盗に恭一が襲われただけだし、寝ていた場所からは割と離れていた。

しかも道中恭一はずっとケツがいたいだの、休もうだの色々文句を言っていたため自分でも思うが足手まといだ。

それは結果論だったとしても、正体不明の人間と一緒に行動するのは、よっぽど無神経な人間なのだろうか……。

「それとも単純に自分が寂しかっただけなのか？……まあいいか、俺もあそこにといたところで何にもならないしな」

物事はプラスに考えてなんぼ。

そう思いなおすと恭一は部屋の電気を消し布団にもぐり込むと、深い眠りに誘われた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8781j/>

黒と白の約束

2010年10月24日07時44分発行